

諸刃の癒し

vegatair

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『痛みを知って力と為す』。

これは一人の少年がヒーローを目指す物語。

僕アカの小説が書きたくてつい書きました。

設定等に不備があれば遠慮なくおっしゃってください！

目次

1. プロローグ	1
2. 入試	8
3. ヒーローを目指す者	15
4. 結果発表	23
5. 『戦闘服（コスチューム）』	31
6. 入学のち試練	37
7. 個性把握テスト	45
8. 個性把握テストI I	53
9. 『癒代と緑谷』	60
10. 『二日目』	67
11. 次なる試練	74

1. プロローグ

夢を見た。それは遠い遠い昔の日。

夕暮れに染まる雲ひとつない空と夕影に濡れた小さな公園。そこには4歳になったばかりの俺と、仲の良かった幼馴染がいた。

オロオロと立ち尽くす俺の前には、怪我をした膝を抱えた幼馴染が泣きじやくっていた。

「きよーちゃん、だいじょうぶ?」

「ひぐつ、ぐすつ……いたいよお」

擦り剥いた皮膚からは血が流れ、尻もちをついた地面に滴り落ちる。涙を流す幼馴染を前に、ちっぽけな子供だった俺が何をできるはずもなく。

でも、何もできないとわかっていても、泣いている彼女を見てじつとしていることができなかった俺は

「いたいのいたいのとんでいけ! いたいのいたいのとんでいけ!」

膝を抱える彼女の手へ己の手を重ね、何度もそう叫んだ。今更ながら意味などないと思う行為だけれど、それでも少しでも気が紛れればと、繰り返しくりかえし。

もはや何度言ったかわからないほど繰り返した、その時——それは起こった。

幼馴染の手を包む両手から溢れる白い光。突然のことに驚き動けずにいると、1分とかわからない内に光は消え、何事もなかったかのように元の景色へと戻る。

「ぐすつ、うえ……? いたい、なくなった?」

涙を止めた幼馴染は震える声でそう呟くと、そっと両手を膝から離す。

するとそこにあつたはずの傷はなくなっており、痛みのなくなった彼女は嬉しそうに顔を綻ばせた。

「けが、なおった! なおったよもろはくん!」

「うん! よかつたね、きよーちゃん!」

これが俺に『個性』が発現した日。

しかし当時の俺は目の前の少女が笑顔になったことがただ嬉しく、自分が個性を発動させたと気づいていなかった。

そして、唐突に感じた体への痛みにさえも……。

??

ことの始まりは中国の軽慶市。『発光する赤子』が生まれたというニュースだった。以降、各地で『超常』は発見され、原因も判然としないまま時が流れる。

いつしか、『超常』は『日常』に——『架空』^{ゆめ}は『現実』に!!??

世界の総人口の約8割がなんらかの『特異体質』である超人社会となった現在、混乱渦巻く世の中で、かつて誰もが空想し憧れた一つの職業が脚光を浴びていた!!??

その職業の名は——『ヒーロー』

超常が日常へと変化し、『個性』と呼ばれる特異体質により激増した犯罪。法の抜本的改正にもたつく間、勇気ある人々が始めた人々が始めた活動。それがヒーロー活動。

たちまち市民権を得た彼らは『ヒーロー』と呼ばれ、世論に押される形で公的職務に定められた。

今やヒーローは世の子供達、いや、人々にとって憧れの的といっても過言ではない。

そして今、そんなヒーローに憧れる1人の少年がいた。

??

辺須瓶^{ベスびん}中学校。このご時世、なんの突出もしていない、ごくごく普通の中等教育機関だ。

そんな学校のいち教室、3—Aと書かれた部屋の中。教壇に立った教師が目の前に広がる、もはや見慣れた光景の生徒たちを見ながら口を開く。

「さて、お前たちも今年で三年生だ。今後の進路について真剣に考え

ていかなければならない時期に入った」

重々しい口調で話す教師。そしておもむろに、教卓の上に置かれたプリントの束、そこから一枚を取りその表面を生徒たちへと見せる。「これから進路希望調査のプリントを渡す。各自、どのような道に進むのか現在のヴィジョンを書いてくれ」

そしてプリントを列の人数分、生徒たちへと配る。プリントを穴があくほど凝視する者、笑いを交え隣の石の友と話し合う者、初めから決まっているのかすぐさま記入する者……と、様々な反応を示す生徒たち。

「なーなー、お前進路どうする?」

「んー……まあ無難に偵校ていこうかなあ」

「だよなー」

「誰か雄英受けねーの?」

「ばっか、お前今年の偏差値知らねーのか? 79だぞ79! 俺らじゃいっしょー無理だつて」

配られたプリントに目を落としながら、前後左右の席の者たちと話し合う生徒たち。そんな喧噪に包まれた教室の中、静かにプリントへ記入をする少年が一人。

彼の名前は癒代ゆいしろもろは諸葉。一纏めにした肩まで伸びた黒髪を揺らし、物静かな雰囲気を漂わせながらシャーペンを動かす彼へ、男子生徒たちは話を振る。

「癒代ー、お前はどーすんだ?」

「……雄英」

「……パードウン?」

「雄英」

どうやら聞き間違えではないらしい。金魚のように口をパクパクとさせた男子生徒は、その表情のまま教壇の教師へと目を向ける。

「あー癒代は雄英志望だったな。まあ模試の結果も合格圏内に入ってるし、実技さえ乗り越えられれば大丈夫だろ」

「先生のお墨付きっすか……さすがは癒代」

「でも雄英の実技って確か、ロボットとの戦闘じゃなかったか? 癒

代の個性で大丈夫か？」

「確かに、癒代さんの個性って戦闘向きじゃないもんね。ちよつと不利じゃない？」

諸葉が雄英を受けると知り、それぞれが思い思いの言葉を口にす
る。

雄英高校。ヒーロー科高校の最高峰と言われる名門中の名門。偉
大なヒーローとなるためには雄英出身であるということが絶対条件
とまで言われている。そんな有名校であれば当然倍率も高く、例年3
00を超えるほど。

まさしくヒーローになるべくした者達が集う学校。それが雄英高
校ヒーロー科なのだ。

「確かに実技は難しいだろうが、ヒーローになりたいなら頑張れよ」

教師の言葉に諸葉は小さく頷く。

彼の個性は『代傷』^{だいしょう}。他者の傷を癒す代わりに、その傷を引き受け
るという個性である。戦闘には不向きな個性ではあるが、それ以外で
は多くの場で活躍することができるだろう。

ただしそれらは彼の体が許容できる範囲までという制約付きだが。

「まあ治癒能力つてだけでも重宝されるしな。ヒーローになつたら
引つ張りだこ間違いなしだぜ」

「ばっか、それじゃ癒代の体が持たねーだろが。災害とかで動きに支
障がある怪我人がいるときに活躍するに決まってるだろ」

「でも癒代さんの個性すごいもんね。一度治してもらったんだけど傷
がすうつ、て消えちやっただもん」

諸葉の個性について再び口々に意見を出し合うクラスメート達。

だが彼らは知らない。諸葉の個性にはもう一つ能力が備わってい
ることに。

「お前ら、癒代のことばっか気にしてないで、自分たちの将来考えろ。
お前らもヒーロー目指すんだろうし、自分たちの個性の幅を広げとけ
よ」

教師の一言で生徒達は会話をやめる。

静まり返った教室で、諸葉はプリントに書いた『雄英高校 ヒー

ロー科』という文字をじつと、授業が終わるまで見つめていた。

放課後。授業という鎖から解き放たれた少年少女達の喧噪が教室を駆け回る、まさに学校にあつて自由を感じることができる時間。

大体の生徒は部活動なりなんなりに精を出す、特別部活動などしていない諸葉は荷物をまとめて早々に教室を後にする。

下駄箱へと向かい、上履きから学校指定の靴へと履き替える諸葉。その背後には、彼に無防備な背中へと近づくと影が。

「よっ、諸葉。一緒に帰ろ」

「……響香」

小さく片手を上げ諸葉へ話しかけるのは、短めのボブカットに三白眼、そして耳たぶから垂れるイヤホンジャックのプラグが特徴的な小柄な少女。

彼女の名前耳郎響香^{じろうきょうか}。諸葉とは幼い頃からの付き合い、所謂幼馴染というやつだ。

幼馴染ということもあり家も近所の二人。響香の提案を断る理由など特になく、諸葉は首肯し了承の合図を送る。

そうして家路を共に歩く諸葉と響香。

「そっぴいやさ、諸葉って雄英受けるんだよね」

「うん。響香は、音楽を続けるの？」

「それなんだよね。音楽は好きだし、父さんと母さんの後を追うっていうのも悪くはないけどさ……」

ぽりぽりと頬をかく響香。その眉尻は下がり、悩んでいるというのが諸葉の目から見ても明らかだった。

「ヒーローになりたいの？」

「……なんだ、知ってたんだ」

「響香が、体を鍛えてるところ、何度か見たことあるから。それに、家にいるときの個性の練習も」

「うわあ、ぜんっぜん気づかなかった。なんか恥ずかしい……」

ヒーロー。今の世代の子供なら多くが憧れる職業。響香もまた

ヒーローに憧れており、同時に両親の後を追い音楽に進む、二者択一で悩んでいるらしい。

そしてヒーロになるためには体づくりと個性の練習、この二つを徹底しなければならぬ。昔から悩んでいた響香は、人知れずヒーロになるための努力をしてきた。

そんな影の努力を知られていたと知り、恥ずかしそうに頬を赤く染める響香。

「あんたにこう聞くのもおかしい話だけどさ……ウチ、どっちにすればいいかな」

その一言に諸葉はしばらくの間黙り込む。人生を左右すると言ってもいい案件だ。そう易々と答えなど出せるはずもない。

響香もこれ以上考えさせるのは悪いと思い、言葉をかけようとしたとき

「響香の……響香の好きにすればいいと思う」

響香の言葉よりも先に、諸葉がそう呟くように言葉を吐いた。

「好きなようつて……聞いたウチもウチさけどさ、なんか投げやりじゃない？」

確かに好きなように、とはほとんど答えになってない。そんな諸葉の返答に、されど笑みを浮かべながら響香。

だが笑う響香を見下ろす諸葉の瞳は真剣そのもので

「響香はどっちの道も選べる。音楽もヒーローも……やりたい方に進むことができる」

「やりたい、方……」

「どっちかじゃない、どっちの道も選べるんだ。だから響香は自分が進みたい道を、好きな道を歩けばいい」

「……なんか、先生みたいなこと言うね」

人生は常に選択の連続だ。その中でいかに自分が『選ぶことができる』と思えるのか。

どちらを選んでも後悔があるのだ。なら苦しんで出した答えより、前を向いて出した答えの方が……きつと後悔は少ないだろう。

諸葉の言葉を受け幾分か気持ち軽くなった響香は、心なしか先ほ

どよりも晴れやかになった笑顔を浮かべ

「……そだね。こんな暗い気持ちで出した答えなんて——ロツクじゃないもんね」

そう言い、ぐっ、と親指を立てる。

そんな響香の笑顔をみた諸葉もまた、つられて笑みを浮かべると

「うん……やっぱり『きよーちゃん』はそうじゃないと」

「ちよっ、諸葉！ その呼び方恥ずかしいから止めろって言ったじゃん！」

「うんわかった……きよーちゃん」

「~~~~~っ！ ぜんつつつぜん、わかってない!!？」

未だ夕暮れには程遠い、暖かな春の日差しが包む二人の家路。そこには一人の少女の怒声と少年の小さな笑い声が響き渡った。

2. 入試

時は流れ雄英高校入試当日。

なにやらメタリックな壁に囲まれた雄英高校唯一の入り口。『雄英高等学校 入学試験会場』という板が立てかけられた校門の前に二人の姿はあった。

「どうとう入試か……なんだかあつという間だったね」

自分たちと同じく、この高校への入学を果たすべくやってきた他校の生徒たち。そんな人の波を眺めながら呟く響香の隣では、鞆の他に細長い布に包まれた棒のようなものを背負った諸葉が、同じくライバルになるであろう生徒たちへと視線を注いでいた。

「はあ……やばい、すつごく緊張してきた」

胸を押さえ顔を引きつらせる響香。普段はサバサバとした性格をしているが、以外と繊細な部分も持ち合わせているのだ。

「全力でやりきるだけ。そうすればいい結果が出せるよ」

音楽の道へ進むことをやめ、ヒーローを目指した響香。後から彼女の親父さんから聞いたことだが、話をする時響香は泣いていたのだという。やはり親の前では申し訳ない、という気持ちが溢れてしまったのだろう。

「今日は楽しもう、響香」

「ははっ、あんたのそういうところが羨ましいよ」

諸葉の平常運転ぶりに思わず笑ってしまう響香。確かに楽しんだもの勝ちだが、皆が本気でやっているというのにそんな考えでいいものか、という考えが頭をよぎる。

「緊張してたら、視野が狭まるし思考も単調になる。だったらいつも通り、自然体でいた方がいい」

「そうだけどさあ……嫌でも緊張しちゃうって」

「でも、ヒーローになったら緊張してる暇はない。その間に、救える命も救えなくなる」

「……そだね。ヒーロー目指すんなら、こんな所で躓いている場合じゃないもんね」

ぱん、と頬を叩き気合いを入れ直す響香。そんな響香に諸葉は安心したように口元を綻ばせ、そして二人は雄英校の校門へと足を踏み入れるのだった。

筆記試験が終わり、講堂へと案内される受験者たち。その列の中に諸葉と響香の姿もあった。

「どうだった、筆記試験？」

「うん。見直しもできたし、合格基準は超えてるはず」

「ウチも。まあこっちはそこまで心配してなかったけど……問題は次だね」

雄英入試の実技試験。仮想敵でロボットが出てくるということだけは知っているが、いったいどういった内容なのか。

いずれにせよ、この先で説明を受けるのだからあれこれ考えていても仕方がない。

「てか諸葉……あんたが持つてるそれなに？」

「ん……持ち込み自由って言ったから。流石に素手じゃ、ロボット相手にやりづらいし」

諸葉の背負う布を指差す響香。諸葉は布の紐を解くと、少しだけその中身を見せる。

布の中、響香の視界が捉えていたのは銀色に光る刃の切っ先。

「それって薙刀？」

「うん……ちよつと、俺専用調整してるけど」

「ふーん……まああんたの個性だったら、それくらいないでしょうがないよね」

諸葉の個性である『代傷』。治癒の個性ではあるが、戦闘では全くと言っていいほどに出番がない。今回の試験では、彼は『無個性』であるのとほぼ同義なのだ。

ただ諸葉自身もそれを自覚している。だからこそ、個性がなくとも戦えるために特訓をしてきたのだ。

戦闘に不向きだからと、悲観することなく、目を背けることなく、そ

んな中でできる最善をこれまで尽くしてきた。戦う個性がなくても戦えるように。

「試験は持ち込み自由って書いてたから、だったら遠慮なく持ち込ませてもらおう」

無論、持ち込み不可だったとしても戦うすべはある。だが素手だとしてどうしてももたつく場面が出てくるので、雄英の持込み可は諸葉にとって非常にありがたいものだった。

そしてたどり着く実技の説明を受ける講堂。中には段々畑のように並べられた机と椅子がこれでもかと設けられ、それぞれ受験生が割り振られた受験番号順に席へと座る。

すると全員が座ったタイミングを見計らい、照明がシャットダウン。突然のことに戸惑う受験生たちだが、すぐに照明は明るさを取り戻し

『今日は俺のライブにようこそー!!?!!? エヴィバデイセイハイ!!?!!?』

いつの間にステージの上に立っていたのか、生徒たちへそうコールをするやや奇抜な格好をした男性が一人。彼はプロヒーロー『プレゼント・マイク』。ボイスヒーローとしてラジオ番組を持つ、雄英の教師の一人だ。

突如現れたプレゼント・マイクと、受験の雰囲気似合わない彼のノリ。受験者たちは言葉を返すこともできず、講堂内は寝静まったかのような静けさに包まれる。

『こいつはシヴィー!!? 受験生のリスナー! んじゃ実技試験の概要をサクッとプレゼンするぜ!!? アーユレディ!!?』

Y E A H H H !!? ——自身でコールアンドレスポンスをするプレゼント・マイク。さすがはプロヒーロー、その心臓のタフさは並大抵のものではない。

「言っちゃなんだけどさ、人選ミスってない?」

「……きつと緊張をほぐそうとしてくれてるだけ」

「いや、そう思いたい気持ちはわかるけどさ……あれたぶん素だって」
受験特有の緊張感をぶち壊していくプレゼント・マイクの説明へ、

響香は乾いた笑みを浮かべながら耳を傾ける。

実技試験は10分間の『模擬市街地演習』。内容は会場に配置された三種の仮想敵、ポイントの振り分けられたそれらを行動不能にすることでポイントを稼ぐと言うもの。

やはり戦闘に特化した個性が有利な試験内容となっている。この場に諸葉と同じ、サポートやその他のタイプの個性を持つものが何人いるかはわからないが、総じて肩を落としたことだろう。

「でも三種って……プリントにはあと一つ仮想敵が居るけど」

響香の言う通り、プリントには三種の他にもう一つの仮想敵が書かれていた。そしてそんな彼女の気持ちを代弁するかののように、少し前の席に座る謹厳なメガネの少年が手を挙げ質問をする。

「どうやら四種目は『お邪魔ギミック』——プレゼント・マイク曰くマリオの『ドッスン』のようなものらしい——で倒してもポイントは入らないらしい。」

「お邪魔ギミックか……無視するのが定石かな」

「……それは時と場合による」

確かにゼロポイントならば戦闘するメリットはない。響香の考えは受験を合格する上では最も効率的なものだ。現に、他の受験生たちも響香と同じ考えを持っている。

ただ諸葉は眉間にしわを寄せ、プリントの四種目の仮想敵へ視線を落とす。表情を険しくする諸葉を不思議そうに見つめる響香だが

『俺からは以上だ!!? 最後リスナーへ我が校“校訓”をプレゼントしよう』

プレゼント・マイクの言葉に顔をステージへと向ける。

『かの英雄ナポレオン!!ボナパルトは言った!!? 「真の英雄とは人生の不幸を乗り越えていく者」と!!?』

そう言葉を並べるプレゼント・マイク。おちやらけた様子のみまだが、しかしどこか先ほどまでと雰囲気が変わったように感じる。

その一言一言に伸し掛かる重み、これがプロのヒーローの言葉なのだど無意識化で実感する受験者一同。

『Plus Ultra!!?——それでは皆 良い受験を!!?』

自らが目標とするヒーロー、その一つの『形』。そんな彼から授けられた言葉に、受験者たちの心はより一層昂ぶるのだった。

プレゼント・マイクの実技試験のプレゼンが終了し、受験者たちはそれぞれの会場へと移動。ただし会場まではバスでの移動で、雄英の敷地がどれだけの規模かを実感させられる。

会場へ着いた諸葉は周りの受験者たちを見つつ準備運動をし、これから起こることを冷静に分析する。

(響香とは違う会場……同じ学校でペアを組ませない作戦)

ここから先、周りの人々は全て敵となる。獲物の取り合い、^{ポイント}戦闘向きではない個性でどう立ち回るか。

「君はなんだ？ 妨害目的で受験でもしているのか？」

「……ん？ あれ、プレゼンの時のメガネ……」

突如誰かを叱るような声が聞こえ不意に目を向けると、そこにはぴっちりとした服に身を包んだあの謹厳そうな彼の姿が。どうやら同じ受験会場だったらしい彼は、ジャージ姿のいかにも気弱そうな少年へ注意を行っていた。

叱られ萎縮する彼を見て、諸葉は疑問を抱く。雄英の試験を受けるということは己の實力に自身があるか、或いは駄目元で受けてみるかの二つ。あの少年は明らかに後者なのだろうが、それにしても気が小さすぎる。それにあれだけ気が小かったら、仮想敵相手に戦えるとも思えない。

謎の受験者に思考を割いていると

『ハイスターター!!?』

どこからともなくプレゼント・マイクの声が響き渡る。呆気にとられる受験生たちは声が聞こえてきた方向、長高の建物へと目を向ける。

すると再び、プレゼント・マイクはその巨大な声で

『どうしたあ?!? 実戦じゃカウントダウンなんざねえんだよ!!?』

走れ走れ!!? 賽は投げられてんぞ!!?」

なんともまあ唐突なスタート宣言だが、確かに言っていることは一理ある。実戦で相手がいちいち合図をしてくれるはずもない。

プレゼント・マイクの合図をきっかけに、試験開始を悟った受験者たちは一斉に入り口へ向かって走り出した。

試験終了まであと『9分50秒』――

諸葉が試験会場へ入ると、そこはすでに戦国時代も真つ青の乱戦状態。受験者たちが蹴散らしたであろう仮想敵の残骸がそこかしこ転がり、いたるところで破壊音が鳴り響く。

「……とりあえず、適当に走ろう」

入り口付近の仮想敵はほとんど倒されていると思った方がいいだろう。諸葉は布の中から薙刀を取り出すと、街の中央へと向かって全速力で駆け出した。

『標的補足!!?』

『ブツ殺!!? マジブツ殺!』

『ヒヤッハッハー!!?』

向かってくる1Pと2Pの仮想敵。諸葉は迫り来るロボットにも慌てず手にした薙刀を構え迎撃の準備を整える。

『死ニサラセ!!?』

『ヒヤッハッハー!!?』

まずは1Pの仮想敵が二機。ロボにしてはやや素早い動きで諸葉へ接近し、アームを振り上げ攻撃を行う。

「動きは早いけど攻撃は大振り……隙だらけ」

見切れないほど早くもない攻撃を冷静に躲し、すれ違いざまに薙刀で振り下ろした腕へ一閃。強度はそこまで高くはないのかその一撃で腕は断ち切られ、続けざまに振るったもう一撃で頭部を吹き飛ばす。これで1P。

そして行動不能となった仮想敵を足場に跳躍。すると先ほどまでいた場所にもう一機の1P敵の腕が振り下ろされる。そんな仮想敵

へ降下の勢いを利用した一撃をお見舞い。薙刀が体深くへ突き刺さったことのより、仮想敵は機能を停止。これで2P。

「次は2P」

今度は四本足にサソリのような尾を持った2P敵。ポイントが高いただけあり、先ほどよりは手強いだろうが——諸葉には関係ない。

仮想敵へと急接近する諸葉は、尾による攻撃を全て避け懐へ潜り込む。そのまま四本の足全てを薙刀で斬り払えば相手は行動不能へ。この時点で4P。

「思ったよりも壊しやすい」

雄英の入試、どれほどのものが出てくるかと思えば、蓋を開ければ大した敵ではない。この程度ならば十分に相手どれると、諸葉は薙刀を持つ手に力を込め更に奥へと向かって走り出す。

残り時間8分27秒——

3. ヒーローを目指す者

試験が始まっておよそ五分が経過した。受験者の中には消耗し息切れを起こすものたちが続々と現れ始めていた。

特に攻撃型の個性を持たないものたちの疲労は激しく、中には諦めリタイアする者もちらほらと出始める。それでも諦めずに戦う者もいるが、体力を消耗し動きが鈍くなったところを狙われ、ロボットから攻撃を受け負傷してしまう。

「くっそが……こんな時に足やられるなんてよ！」

仮想敵にやられたのか、足から血を流し顔を顰める受験者。それでも必死に動こうとするが、痛みで満足に立つこともできずにいる。

そんな受験者へ近づくのは、すでに20Pを獲得した諸葉だった。自分の方へ向かってくる諸葉に受験者は怪訝そうな視線を向ける。

「怪我、したの?」

「見りやわかるだろ。お前何しに来たんだよ、茶化しに来たんならどっかいけ!」

「……ちよつと見せて」

「は? 見せろって——イダダダダ!? おまつ、動かすな痛えんだよ!」

諸葉が傷口を確認するために足を動かすと、激痛により涙目になった受験者が抗議の声を上げる。

「大丈夫、少し我慢して」

「大丈夫って、なに、が……う!」

無視して足へと手を触れる諸葉へ怒鳴りつけようとするが、不意に視界の下から溢れ出す白い光に一時中断。光へと視線を落とすと、目の前の少年がかざした右手から光が出ているではないか。

十秒とかからず光が収まると、受験者の足の怪我は綺麗さっぱり消えていた。歩くのに支障があった怪我がほぼ一瞬で治癒したことに、受験者は驚き言葉をなくす。

「これで動けるはず。でも、無茶はしたらダメ」

「お、おい! お前、何で俺を……俺たちは敵同士だぞ!?!」

雄英への入学という狭き門。それを潜り抜けるためには他者を蹴落とさなければならぬ。自分だって放っておけば勝手にリタイアするであろうに、何を思っただけで傷を癒したのか。

メリットなど一切なく、むしろライバルを戦線復帰させると自分の首をしめる行為。それをわかっていたいながら、目の前の男は一つ躊躇うことなく治癒を行った。

諸葉の理解できない行動に受験者は声を大にして問い詰める。だが怪我を治し、この場にいる理由がなくなった諸葉は黙って受験者へと背を向け

「敵だとか味方だとか関係ない。困っている人がいたら助けるのは、ヒーローとして当たり前」

そう告げると、受験者の前から走り去る。

メリットだとかそういうものは一切関係ない。傷つき倒れているのなら、それは諸葉にとっては救うべきものだから。敵だとかライバルだとか、そんなもの二の次三の次なのだ。

「……今の怪我は、少しいた」

治癒した受験者のことを思い返しながら顔を顰める諸葉。個性により治癒した分の怪我をその身に引き受けたからだ。

ただ諸葉の個性である『代傷』^{だいしょう}は治癒した怪我をそのまま引き受けるのではなく、それらを『痛み』や『ダメージ』へと変換して受け取る。ゆえに外的変化はないが、それはあくまでも許容できる範囲まで。限界を超えて使用すればどうなるかは諸葉本人も知らない。

現在諸葉の体には痛みと肉体への負荷の両方が襲いかかっている状態だ。まだ許容できる上限まで余裕はあるが、重ね続けられれば無視できないほどにまで至るだろう。

「うう……いったあ……」

「……」

ただそんなデメリットが諸葉を止めるのかというならば、それは否だ。現に再び見つけた倒れる受験者の少女へ、諸葉は躊躇することなく駆け寄り治癒を施している。

「あ、ありがとう……」

「どうも」

治癒を終えた諸葉のダメージ量はだいたい許容上限の三割ほど。それは体に走る痛みは無視するには少しばかり強くなってきた頃でもある。

まだ動きに支障は出ないが、それでも痛いものは痛い。我慢できるけれど痛い。

『目標……撃ち殺す!!?』

そんな諸葉の前に姿を現したのはミサイルを携えた3Pの仮想敵。先のもものよりも装甲も頑強で攻撃も重い。1・2Pの仮想敵に比べて行動不能にするのに時間がかかってしまうだろう。

『残り時間2分15秒!!?』

「2分……そろそろ、使える頃かな」

プレゼント・マイクによる残り時間の通告を聞き、諸葉は薙刀を握る手に力を込める。深く息を吸い、そして吐く。

すると諸葉の体を白い光がオーラとなって包み込み、束ねた黒髪がふわりと浮かぶ。明らかに先ほどまでと雰囲気が変わった諸葉だが、ロボットに警戒という心はなく

『クタバレヤ人間!!?』

諸葉へ向け砲口から数発のミサイルを発射する仮想敵。追尾機能はなくとも、数分違わぬ狙いで放たれたそれらは諸葉目掛けて一直線に飛んでいく。

迫るミサイルに謎の白い光をまとった諸葉は

「——ふっ——」

一息。それと同時に薙刀を振るうが、その速さとキレは試験開始時と比べて格段に増し、直撃するミサイルを全て切り落とす。

後方で起こる爆発。爆風に揺られることなく、諸葉は両脚に力を込め地を駆ける。これもまた、今までとは比べ物にならないほどに速く、瞬きの間に仮想敵との距離を詰める諸葉。

「はあああっ!!?」

気合のこもった一声。振り上げられた薙刀はアームを容易く斬り裂き、追撃で振り下ろした一閃が頑丈な装甲に包まれた胴体を両断す

る。

まさに一蹴。一方的に仮想敵を行動不能にした諸葉は、散らばった残骸を一瞥し会場を駆ける。

諸葉の急激な身体能力の上昇。それは彼の個性『代傷』に隠されたもう一つの能力によるものである。

『痛みを知って力と為す』……傷つくほど、ダメージを負うほどに身体能力などを増大させる能力だ。

傷を力へと代える——まさに『代傷』

「……久しぶりに使ったけど、やっぱり体が慣れてない」

上昇した身体能力を持って余しているらしく、走りながら先ほどのイメージとのズレを調整する。

傷つく、またはダメージを負うという性質上、普段はこの能力を使うことはほとんどなく、口にした通り慣れていないのだ。

「やっぱりまだ調整が……ん？」

不意に、地震のような地面を揺らす振動に諸葉は足を止める。揺れは徐々に徐々に大きくなり、周りの受験者たちも何事かと周囲を見回しその正体を探す。

そんな中、諸葉はこの揺れの正体にいち早く気づく。いや、考えれば誰でもわかることだ。プレゼント・マイクのプレゼン時、配布されたプリントの『四種目の仮想敵』。お邪魔ギミックとして現れるロボット。

今まで遭遇したのは全て1〜3Pの仮想敵だった。そして試験終盤の今、新たに現れるとしたら、それは——

ズウウウン！——今までで一層大きい地鳴り。直後、諸葉の視線の先に建っていたビルが崩壊。そこから巨大な、今までとは比べ物にならない大きさの仮想敵が姿を現す。

「おい……おいおいおい！　なんだよあれ!?!」

「決まってるだろ！　OPの仮想敵だよ！」

「早く逃げろ！　あんなもん、戦うだけ無駄だ！　ポイントも入んねーしよ！」

巨大仮想敵——その圧倒的脅威に受験者たちはすぐさま踵を返し

逃走する。無論、諸葉もあんなものを相手にできるほどの力を有してはいない。間違いない逃げるという選択がベストだろう。

ただ――

「くそっ、逃げきれねえ！」

「誰か、手を貸して！ お願ひ！」

怪我をし逃げ遅れる者。それらを置いて逃げるという選択を、諸葉は端から持ち合わせてなどいない。

強化した走力で即座に負傷者の元へ駆けつけ治癒を施す。視界に映る範囲ではぎつと数人、これならばあの仮想敵が追いつく前に全員を治癒することができる。

そうして治癒を続ける諸葉だが、同時に増していく痛み表情が強張る。それでも治癒を続け、無事最後の一人まで傷を治すことができたと思つたその矢先。

「いったあ……」

もう一人、負傷者の声を聞き目を向けると。そこには瓦礫に片足を取られ地面に倒れる少女の姿が。

(場所が悪い……治癒したとして、逃げ切れる距離じゃない)

彼女が倒れる場所、それは巨大仮想敵のほぼ目の前。諸葉が治癒を施したとして、逃げ切れる可能性は限りなく低い。

だがそれが助けられない理由になるわけもなく、諸葉が駆け出そうとしたその時、彼の横を一つの影が通過する。それもあの巨大仮想敵に向かつて。

いったい誰が、その人物に視線を向け目を疑う。それもそのはず、その人物とは試験開始前に注意を受けていたあの気弱な少年だったのだから。

少年は足に力を込めるとその場で跳躍。しかしそれはただの跳躍ではなく、巨大仮想敵を飛び越えんばかりの超跳躍であった。

それだけでも目を疑う事象であるのに、さらに少年は拳を握りしめ――巨大仮想敵の顔面を殴り飛ばした。相当の威力なのか頭部はぺちゃんこに凹み、付随する部分が衝撃で粉々に砕け散る。

「……まじか」

さすがの諸葉もこれには驚くしかなく、倒れる巨大仮想敵と宙を舞う少年を呆然と見つめる。だがすぐに我に帰り、倒れる少女の元へと駆け寄る。

「大丈夫？ 今瓦礫どけるから、少し待ってて」

「あり、がとう……うつぶ」

気分が悪いのか、口元を押さえる少女。すぐに瓦礫をどけ、足の傷を治癒する諸葉。幸いそこまで酷くはなかったため、諸葉に掛かる負担も思ったより少なくすんだ。

「これで動けるけど……気分悪いのか？」

「う、うん、ちょっとだけ……。それよりも、あの人は……」

「今頃降りてきてるはず……っ！」

少女の問いに答え上を見上げる諸葉は表情を一変させる。

「まずい、着地の体勢が出来ていない。このままじゃ、地面に衝突する」

「だっ、たら……私を、あのロボの上に……」

「……わかった」

少女の指示通り、彼女をロボの残骸の上に乗せる。すると彼女は残骸へと触れ、その後両手の五指を合わせる。

するとどうだろう、彼女の体は残骸とともに浮かび上がり始めたではないか。

「私を、あの人のらっか、うつぶ……地点まで……」

「……うん」

どうやら触れたものを浮かせる個性らしい。少女の言う通り、浮かび上がった彼女を残骸とともに少年の落下地点へ。

すでに少年は目と鼻の先まで近づいており、タイミングを見計らって少女は

「えいっ！」

「ぶへえっ……っ？」

少年の頬にビンタをお見舞いする。しかしこれで個性の発動条件を満たした少女は少年を浮かせ、地面への衝突を未然に防いだ。

「かい、じよ……っ！」

再び五指を合わせると個性が解除され、少年少女ともにゆつくりと降りる。諸葉は即座に少年へと駆け寄り安否を確認するが、その想像以上の状態に息を飲む。

巨大仮想敵を殴り飛ばした腕、そしてあの超跳躍を行った両足すべてがボロボロだったからだ。ジャージが破れさけ出された右腕は赤黒く染まつており、おそらく両足も同じような状態になっているのだと予測がつく。

(俺の個性で治癒できても、完全に治すのはほぼ無理……)

これほどまでの大怪我だ。個性で治癒したとして、自身が引き受けるダメージは相当なものになるだろう。間違いなく、過去最高の激痛が襲うはずだ。

「せめ、て……せめてワンポイントだけ、でも……っ！」

激痛で顔中を涙で濡らす少年。彼の言い放った一言に、諸葉は目を見開いた。

ワンポイントでも——つまりこの少年は未だにポイントを獲得していなかったということ。だということに、倒してもポイントにならない敵へと立ち向かい、その身を壊してでも倒した。

すべては瓦礫に足を取られた、あの少女のために。

始まる前は疑問に思っていた、なぜこの少年が雄英を受験したのかという疑問。その理由が今はつきりとわかった。彼もまた、ヒーローを本気で目指していたということ。

そして訂正をする。気弱だと、仮想敵に立ち向かえるはずがないと決めつけたことを。

『しゅくりょくう!!?!!?』

無慈悲にも、プレゼント・マイクにより告げられる試験終了の合図。それを耳にした少年は、ショックからかはたまた激痛からか白目をむいて気絶をする。

諸葉は両膝を着き、気絶した少年へ右手をかざす。

(君が、こうなることを覚悟して立ち向かったのなら……俺も覚悟を決める)

許容上限、いったいどれほどの激痛が襲うのか考えるだけでも寒気

がする。だが、この少年は躊躇うことなくその痛み飛び込んだのだ。彼の信じるもののために。

ならば自分も覚悟を決めよう……傷ついた人を助けるという、自分の信念を貫くために。

「それに、限界を知っておくのもいい経験だし」

覚悟を決め、個性を発動する。そして諸葉の右手から溢れた白い光が少年の体を包み込む。

直後——諸葉を襲うのは、今までの比にならないほどの激痛。

「ぐっ……いっ……た……っ！」

身体中を破壊し尽くさんがごとき激痛が諸葉の体を駆け巡る。思わず治癒の手を止めそうになるが、そこは意地でも続ける。

（予想っ、してたけど……っ！ これは、なかなか効く……っ!!?! ?）

激痛に眩みかける視界。意識を集中させるため右手に視線を向けると、伸ばした腕からは皮膚を裂くように飛び散る鮮血が。おそらくこれが許容上限を超えた証拠だろう。

なるほど体に収まらなくなった『ダメージ』が、こうして体を食べ破るように体外へと出されるのか——激痛に蝕まれる中、冷静に個性を分析する。

これ以上限界を超えたらどうなるのか、個人的に知りたいところだが

（もう……これ以上は、無理）

さすがにここから先は体が保たない。個性の発動を止めた諸葉は、まるで糸が切れた人形のように地面へ仰向けに倒れる。

右手へ視線を向ければ未だに血が流れ、他にも体の至る箇所から流血が起きていた。なんとか止血をしたいが、痛みとダメージで体が全く動かない。

激痛で思考もうまくまとまらない中、諸葉は雄英の看護教諭である『リカバリーガール』が来るまでこの地獄に晒され続けるのだった。

4. 結果発表

雄英の入試も無事に、とはいかないが終了し校門へと向かう諸葉。あの後雄英の看護教諭である『リカバリーガール』の治療により、体の傷もだいぶ抑えられ歩けるほどにまで回復した諸葉。しかしまだ完全には消えておらず、歩きたびに微かに痛みが走る。

若干重い体に鞭を打ち校門を潜り抜けると、先に出ていた響香が近づいてくる。

「お疲れ諸葉。試験、どうだった？」

「うん……23Pだった」

「……てことは、他の受験者助けてたんでしょ」

頷く諸葉に響香は、はあ、とため息を吐く。

「あんた、自分の個性わかってんの？ 怪我治したら自分が傷つくんだよ？」

「わかってる。でも、それが助けられない理由にはならない」

「……ま、それがあんただもんね」

傷ついた誰かがいるのなら、迷わず手を差し伸べる。幼い頃からの付き合いだ、こういう人間なんだということは百も承知している。

ただ試験という場所であつてもそれを貫くところはさすがだとか言いようがない。

「俺は俺が正しいと思うことをした。後悔なんて欠片もない」

「そっか……じゃ、もうこの話はいいね」

本人が後悔していないというならば、これ以上話をするのは野暮つてもものだろう。話を切り上げバス停まで向かう二人。

「ねえ、帰りに寄り道していい？ ウチ、ちよつと買いたいものあつてさ」

「ん、いいよ」

今年最後の一大行事を終えた二人は、若干軽くなった足取りで来た道に戻っていく。

響香との買い物も終わり帰宅をする諸葉。ごく平凡な一軒家、その玄関の扉に手をかけ中へ入る。

大ききの違う靴並んだ靴箱に自分の靴も並べ、奥へと進んでいく。玄関入ってすぐにある右の扉、そこを開けるとリビングへと繋がっており、諸葉はそこにいる二人の人物へと声をかける。

「ただいま……」

「おう、おかえりー」

「お、おかえり諸葉！」

帰宅した諸葉を出迎えたのは彼の両親。リビングのソファに腰掛け、ダラーンと座るのが父親の癒代^{りき}。対照的に姿勢正しく座り、どこか心配そうな声を出すのが母親の癒代^{ちさき}。治沙希だ。

「も、諸葉……試験どうだった？ 怪我してない？」

「試験は……まあやれることはやった。怪我は少ししてる」

「ど、どこ!?？ お、お母さんが治すから見せて！」

「大丈夫。雄英の先生に治してもらったから」

心配性である治沙希は怪我をしたと聞いて大慌て。胴体を、腕を、顔をと触り怪我を探す。そんな母親を落ち着かせる諸葉の手慣れ具合、伊達に物心ついてから宥めてきたただけはある。

そしてソファでだらける父の元へと向かう。自身の正面に立つ

諸葉へ、力は「よっこいしょ」と体を起こし

「それで？ どこまでやれたよ？」

「……仮想敵^{ヴァイラン}を16体。獲得したポイントは23P」

「それはどうだ？ 多いのか？」

「ううん……たぶん合格には届いていない」

「あっはっは！ そうか、届かなかったか！ まあお前のことだ、どうせ他人を助けてたんだろ？」

少しトーンを落とす諸葉だが、対照的に力は声高々と笑い声をあげる。そんな力を治沙希は怒気を含ませた声で叱る。

「もうお父さん！ そこは慰めるところでしょう！」

「はははっ、いやいや母さん、慰めなんて必要ねーよ」

治沙希を手で制し、力は諸葉へ視線を戻す。

「こいつが『やれることはやった』って言ったんだ。なら、後悔なんて何一つねーさ。そうだろ、諸葉？」

「……うん」

「確かに試験に合格するのは大事さ。けどな、そのために自分の大切な信念を捨てるようじゃ……最初からヒーローになる資格なんざない」

そして力はソファから立ち上がり、右手で正面に立つ諸葉の肩を掴む。己を見つめる父の瞳には、先ほどのダラけた雰囲気は一切なく、力強い光だけが灯っていた。

「お前が誰かを見捨てて合格狙ったって言ったら、俺は殴るつもりだった……だがそんなの杞憂だったな！ やっぱりお前は俺の自慢の息子だよ！」

そして空いた左手で諸葉の頭を強く撫でる。ガシガシと乱暴に撫でられる諸葉だったが、その顔は嫌がっている様子もなく、父の気がすむまで黙って頭を下げ続けた。

「よっしゃー！ じゃあ諸葉の受験記念だ、今夜はパーつと豪勢に行くとするか！」

そんな父親の一言を切っ掛けに、癒代家のミニパーティーが始まるのであった。

雄英の入試を受けてから一週間後。

神妙な顔をした諸葉は自室の机とにらめっこをしていた。いや正確には机の上に置かれた小さな封筒と、だが。

彼の元に届いた一通の封筒。その封筒の右下には『雄英高校』という文字が刻まれている。つまりは合否の通知というやつだ。

「……とりあえず、開けよう」

このまま見つめていても無駄に時間を消費するだけ。諸葉は封を切ると、中に入っていた数枚の書類、そして丸い機械のようなものを取り出す。

丸い機械はおそらく投影装置か何かだろう。諸葉が装置を操作し映像を再生する。すると諸葉の目の前の空間にモニターが展開され

『私が投影されたア!!?』

画面にこれでもかと言うほどのアップで映ったのは、一人だけ画風の違う男性。

頑強な肉体、仮面ライダーのように跳ね上がった二つの前髪をしたその男性を見て、諸葉は目を見開く。

「オール、マイト……?」

モニターに照射された男性。彼こそN.O. 1ヒーローと名高いヒーローの中のヒーロー『オールマイト』。

もはや生ける伝説とさえされている彼がなぜ、雄英の合否発表の映像に映し出されているのか。思わぬ人物の登場にそんな疑問が胸中を占めるが

『初めましてだな、癒代少年！ おそらく疑問に思っているだろう私が映っている理由！ その答えはシンプル、今年の春から雄英の教師として勤めることになったからさ!』

「雄英……教師……まじか」

そんな疑問を予測していたかのように言うオールマイトに、諸葉はただただ呆然と漏らすことしかできない。なぜならN.O. 1ヒーローだ。そんな人物が教師として教えてくれるなど、ヒーローを目指すものにとってこれ以上ないほどの幸せと言えるだろう。

『さて、そろそろ気になっている合否の結果だが……癒代諸葉 ライオン 敵ポイント23点。筆記の方は合格ラインを超えてはいたが、惜しくも不合格だ』

オールマイトから告げられる不合格の知らせ。

わかっていたことだ。こうなることは、試験が終わった時からわかっていた。ただそれでも、やはり胸にくるものはある。

無意識に項垂れる諸葉。そんな諸葉の反応を見越していたのか、オールマイトは口の両端をあげると

『ただそれは、敵ポイントのみを見た場合ならね!』

そう、言葉を続ける。

思わず顔を上げた諸葉に、オールマイトは両手でバツのジエス
チャーをすると

『我々雄英が見ていたのは敵ポイントのみではない！ 救助ポイントレスキュー』
ト、それがもう一つ見ていた基礎能力だ！』

実技の試験では戦闘力や機動力など、戦う場における能力がある
かどうかが試されていた。しかしそのほかにもう一つ、ヒーローとし
て大切な根幹『人助け』の精神があるかどうかも見えていたらしい。

『癒代少年、君の個性とその使い方を見させてもらったよ。傷ついた
者に手を伸ばす、自らを省みず他者を助ける姿、そしてその心を！
それこそ、ヒーローをヒーローたらしめるに必要なもの！』

拳を握り、力説するオールマイト。

『癒代諸葉、救助ポイント45点！ よって実技総合68点！ 文句
無しの合格だよ！』

人によっては諸葉の行為はただの偽善行為というものもいるだろ
う。自分よりも他人を優先するなど、馬鹿のすることだと、そう罵る
ものもいるだろう。

『偽善と、綺麗事だと言われようが関係ない！ ヒーローとは、命を賭
してそれらを実践するお仕事だ！』

だがオールマイトは、それこそがヒーローに必要なものだと呼ぶ。
そんなNo.1ヒーローの言葉に、諸葉は何も言えずただ呆気にと
られ、その叫ぶ姿を見つめる事しかできなかつた。

『もう一度言おう、合格だ癒代少年！ おめでとう、雄英で待っている
ぞ！』

そう言い、差し出された手。No.1ヒーローとして多くの人々を
救ってきたその手が今、自分に向けて差し出されている。

その事実には、諸葉は込み上げてくるものを必死で抑え

「はい……っ！」

詰まり詰まりになりそうな声で一言、そう返事を返す。

そして映像は途切れ詰まり返った部屋の中、未だモニターが出てい
た空間を眺める諸葉の瞳から、一筋の涙が流れる。

??

場所は変わり雄英高校。合格発表から2週間が経過した現在、職員室にてパソコンを眺める男性が一人。

全身黒の服に身を包み、包帯のような何かを首元に巻いた彼は、机のパソコンに映した書類を観察するようにじっと見つめる。

そんな彼の背後からやってくるのは、入試でプレゼンを担当したヒーロー『プレゼント・マイク』。

「ようイレイザー！ なにしてんだ、パソコンなんざ眺めてよ！」

「……マイク。別に、これから受け持つ生徒たちの『個性』を確認しているだけだ」

彼を『マイク』と呼び、気だるそうな声で答えるのは雄英教師のプロヒーロー『イレイザーヘッド』こと相澤消太だ。

教師として一年生を受け持つ彼は現在、パソコンに映る春から生徒となる人物たちに視線を向け、各々の個性の特徴や弱点などを探しているなのである。

「今回は全体的に粒揃いだが、中でも突出しているのは轟と爆豪だな。前者は個性も強力だが応用も頭一つ抜きん出ている」

「こいつは俺も知ってるぜ！ 推薦試験で記録塗り替えた一人だ！」
「んで後者……爆豪だが、こいつははつきり言って戦闘センスの塊だ。個性も汎用性が高い」

「一般入試トップのあいつか！ 確かにこいつはタフネスの塊だったな！」

「今の所、こいつら二人が俺のクラスでトップだな」

そう言うのと相澤は次の書類を画面に表示する。そこには二人の男子の情報が記されており、マイクはそのうちの一人を見るとずびしいつ、と指をさす。

「こいつは入試の仮想巨大敵をぶっ飛ばしたやつじゃねえか！」

「ああ……緑谷出久。こいつの個性は力だけで言ったら強力な部類だ」

「だろお!? あれだけの超パワーはプロでもうそういねえって！」

「だがその反面、その力に自分の体がついていけない。一発殴って使い物にならないんじゃ、ヒーローとしてやって行くのはおろか、ヒーローになるのすら絶望的だ」

相澤の視線の先、そこには入試の実技試験で巨大仮想敵を殴り飛ばした気弱な少年の写真が。はしやぐマイクをよそに、相澤は少年の致命的弱点を指摘し、現段階での正直な感想を述べる。

確かに個性そのものは凄まじい力を秘めているが、それに対するデメリットもまた大きすぎる。これでプロヒーローになるのはほぼ無理だろうというのが相澤の見解だった。

「それで次の生徒だが……」

「ああ、こいつもさっきのやつと同じ試験会場にいたやつだな！ 確かにカバリーガールと似た個性持ちだったっけか？」

「癒代 諸葉……個性『代傷』。他者の負った傷を代わりに引き受ける個性だ。ばあさんの個性とは似ても似付かねえよ」

そう言いながら、相澤はパソコンを操作する。すると画面が切り替わり、一つの映像が流れる。そこに映っていたのは、右手両足をボロボロにした出久の傷を治癒する諸葉の姿が。

なぜにこのような映像を流しているのか、不思議に思ったマイクは相澤へ声をかける。

「これって試験が終わった後のやつだろ？ イレイザー、これ流して何の意味があんだ？」

「黙って見てろ……すぐにわかる」

「すぐにつて……おおおおお!?」

驚愕の声を上げるマイク。画面の向こう、右腕を中心に全身から血を吹き出す諸葉の姿にマイクの瞳は奪われる。

驚くマイクとは対照的に、相澤は冷静に目の前の現象を分析する。「こいつの個性、おそらく引き受けられるのにも上限があるだろう。それを超えたらこの全身血の噴水状態になるわけだ」

「おいおい、緑谷の個性もすげえって思ってたら……こいつも負けず劣らず凄まじいな」

「こいつら二人に関しては、俺が直接校長に受け持つと頼んだ。こい

つらが見込みがあるかないか、俺が判断し除籍にするかを決める」

そう呟く相澤の瞳は真剣そのもので、嘘偽りなど微塵もない。それもそのはず、彼が雄英に教師として勤めて以来、154回もの除籍処分を行ってきたのだから。

ヒーローとしてやっていける見込みがないものや、覚悟がないものは即座に除籍する。中途半端に夢を負わせることこそ残酷なものだとする相澤は、その考えのもとこれまで除籍を行ってきた。

「ヒーローが動けなくなつて使い物にならないんじゃ話にならない。こいつらがそれを理解しているのか、俺がこの目で直に判断する」

「つたく、相変わらず仕事熱心な野郎だな、イレイザー!」

口調も考え方も厳しい相澤だが、それこそが彼なりの優しさなのだろう。そんな同期の背中を笑いながら叩くマイク。

「よっしゃ、じゃあ今日飯食い行こうぜ! なあいいだろ、イレイザー?」

「……じゃあつて、飯の話してなかっただろうが。まあ別にいいが、まずはこれが終わってからだ」

「オーケー! んじゃ俺も暇つぶしがてら終わるまで解説してやるよ!」

「やめろ邪魔だ。せめてここじゃないどこかで潰してろ」

迷惑そうに漏らす相澤などつゆ知らず。マイクは彼の受け持つ生徒たち一人一人の解説を始める。

——雄英高校入学式まで残り『約2週間』

5. 『戦闘服（コスチューム）』

「よ、おはよ諸葉」

「いらつしやい響香……あがつていいよ」

時は少し戻り、雄英からの合格通知を受けて数日後。現在諸葉の家の前には私服姿の響香が。

「あれ、今日は親父さん達いないんだ？」

「今日は二人とも仕事に行ってる。お茶用意するから、先に部屋に行ってる」

「わかった」

諸葉に促され、二階にある彼の自室へと先に向かう響香。その間に諸葉はお茶とお菓子の準備をし、それらを部屋へと運ぶ。

中に入ると、部屋の座椅子に背中を預けた響香が諸葉へと顔を向ける。

「お茶、持ってきたよ」

「ん、ありがと」

二人分のお茶とお茶菓子を机に置き、諸葉も響香の対面に座る。

さて、ここからが本題だが、なぜ本日 響香が癒代家を訪ねてきたのか。諸葉と幼なじみの関係である彼女なら、単に遊びに来たという理由でも納得はいく。しかし今日は遊びに来たわけではないのだ。

「それじゃ考えよっか……『コスチューム戦闘服』」

「……うん」

響香が諸葉の家を訪れた理由。それは雄英へ送る『戦闘服』をどのようなものにするかを考えるためだ。

雄英は入学前に自身の個性に合った、または補助・強化するための『戦闘服』の要望を提出させる。そこに書かれている要望を可能な限り再現し、彼らの個性に幅を効かせるのだ。

ヒーローとは『ただ個性を扱える』だけでなれるものではない。個性を手足のように扱い、尚且つ応用を効かせることが重要となってくる。

しかし個人の努力だけでは限界があるのもまた確か。そこで『戦闘

服』に頼ろうというわけだ。科学の力はすごい！

というわけで、『戦闘服』について考え始める二人。

「響香はイメージできてるの？」

「まあ少しはね。服装に関してはさ、前々から考えてはいたんだ」

そう言うのと響香は鞆から取り出したノートを見せる。そこには簡易的に描かれた服の絵があり、それが彼女のコスチュームであるというこがわかる。

服装は裾の丈がお腹までの黒の上着に赤いシャツ、白い指ぬきグローブ、そして黒いズボンに黒の靴といったもの。

「こんな感じだけど……どうかな」

「うん、いいと思う。ただ……」

やはり他人に見せるのは恥ずかしいのか、耳たぶのコードを弄りながら問いかける響香。

そんな響香の『戦闘服』をぱっと見た際の諸葉の反応はというと

「これ、ロックをイメージしてる？」

「……まあ、ちよつとだけ」

響香は大の音楽好きだ。聴くだけではなく、大抵の楽器を弾くこともできる。中でもロックがお気に入り、サバサバとした彼女の性格はロックが好きなのが関係しているのかもしれない。

おそらく『戦闘服』にもロックな要素を組み込んだのだろう。見た感じ、バンドのメンバーの中に紛れていてもなんら不思議ではない格好だ。

「やっぱおかしいかな……」

「ううん、響香らしくていいと思う。俺はこれ、好きだよ」

「……そっか」

響香はぶっきらぼうに呟きつつそっぽを向く。しかしその頬は朱に染まっており、傍目から見ても照れているのがバレバレである。

『好き』と真正面から言われたら照れるのもわかるが……サバサバした性格をしているとはいえ中身は乙女な響香なのであった。

そんな響香の様子に気づいていないのか、はたまた気づいていて敢えて無視しているのか、諸葉は響香の『戦闘服』についてある疑問を

投げかける。

「響香、この『戦闘服』何か補助つけないの？」

「あ、ああつ……ごほん。それについては一応考えてはあるんだけど……こういう感じのヤツ」

「……スピーカー？」

「そ……ウチの個性は挿さないと効果ないからさ。ならスピーカーを使って振動を飛ばせないかなって」

「そう言い、響香がページをめくるとそこにはブーツと一体化したスピーカーの絵が描かれていた。

響香の個性は『イヤホンジャック』。耳たぶのコードは最大6mまで伸ばすことができ、先端のプラグを繋ぐことで対象に自身の心音を衝撃波として叩きつけることができる。

また壁などにプラグを挿すことで微量の音を聞きとることができ、壁の向こうの話やある程度距離の離れた人数も把握することが可能。さらにコードも速さ・精密度は非常に高く、近・中距離に対応した非常に汎用性の高い個性だ！

ただそれらは全てプラグを挿すことで発揮することができる。逆を言えばプラグを挿せない限り相手に決定打を与えることができないわけだ。

それを補うため、響香はブーツに特製スピーカーを設置。それを使うことで衝撃波を飛ばすことを可能にしようというわけだ。

「これなら相手に近づかなくても対処できるし、ウチ的には結構いいかなって思うんだ」

「確かに、これだったら戦闘の幅も広がるし、いいと思う」

「よし、じゃあウチの『戦闘服』はこれで完成かな。次はあんたのヤツだけど、何か考えてるの？」

響香は自身の『戦闘服』については一通り完了。次は諸葉のものを考える番で、諸葉は響香と同じく勉強机からノートを取り出すと、机の上に広げておく。

そこに描かれていたのはチャイナドレスのような『戦闘服』だった。色は黒を基調とした上着の部分の裾は脛あたりまでであり、腰部から裾

の終わりにかけてはスリットのような加工が施されている。そしてスリットの部分から覗くのは白い袴で、しかしゆったりとしたものはなくややしぼってある。

見た目はかなりシンプルな中国格闘家のような服装だ。

「動きやすさと目立つの考えたら、これくらいしか思いつかない」

「まあいいんじゃない？ あんた薙刀使うんだし、結構マッチしてると思うよ」

響香の言う通り、諸葉は基本的には薙刀、または棒術を用いて戦闘を行う。彼の考案した『戦闘服』は自身の戦闘スタイルと非常にマッチしていると言えるだろう。

「でも、あんたの個性って補助のしようがないから辛いよね」

「……まあ戦闘向きじゃないし。サポート型だから」

諸葉の個性『代傷』だいしょうは治療系統の個性だ。戦闘系なら威力強化やリスク軽減などの補助ができるが、そもそも諸葉の個性自体補助を必要としないのだ。もしあるとすれば、個性ではなく諸葉の戦闘スタイルに合わせた補助になるだろう。

「ただ、鎮痛剤とかつけてくれたら嬉しい」

「だね。てか、鎮痛剤飲んだらもつとたくさん個性使えるんじゃない？」

「わからない。でも、多分無理だと思う。体の限界だから、痛みを感じる感じないじゃないと思う」

『代傷』とは『痛み』や『ダメージ』の蓄積だと諸葉自身考えている。いくら鎮痛剤で痛みを抑えたとしても、体に蓄積されたものが消えることはないだろう。

しかし痛みを抑えることができれば、無理をした治療をしたとしても戦闘を行うことができるようになるはずと予想し、諸葉は『戦闘服』に鎮痛剤を仕込むよう要望を出す。

「それじゃ、この話に関してはこれくらいでいいかな」

「うん……響香、お昼食べていく？」

「え、もうそんな時間……ほんとだ。じゃあご馳走になろうかな」

諸葉の言葉で目覚まし時計に目を向ける響香。どうやらそれほど

長く話し合っていたらしい、時計の長針と短針はぴったり重なり合っていた。

昼を自覚した途端、突然お腹が減ってくる。響香は諸葉の言葉に甘え、お昼をご馳走になるべく一階のリビングへと向かった。

「それにしても、オールマイトが雄英に来るなんて驚いたよね」

それは昼食後、リビングで寛ぐ響香が何気なく放った一言。

「確かに驚いたけど、オールマイトは雄英出身。教師としてくるのも納得はいく」

「そうだけどき、でもあのオールマイトだよ？ No. 1ヒーローに教えてもらえるってだけでかなり贅沢だと思うけど」

オールマイト。No. 1ヒーローとして名高い彼に教えてもらえるのは、ヒーローを目指すものたちにとってはこれ以上ないほどの贅沢だ。

事実、今はいつもの平坦な声で答えている諸葉だが、あの合格通知の時には呆然としていたのだから。

「というか今更だけどき、二人揃って合格できてよかったよね」

「うん……響香は兎も角、俺も受かったことに先生驚いてたし」

「ははっ、そういうえばあんたのこの担任泣いてたもんね！」

思い出したかのように笑う響香。諸葉も口元を綻ばせ、当時のことを思い出していた。

あの時の諸葉の担任の泣き様と言ったらそれはそれは物凄いものだった。普段は寡黙で厳しい印象を与える先生だったのだが、まさか一人の生徒の合格でここまで涙を流すのかと、そのギャップに目を疑うほどに。

「まさかあんなに泣くとは思ってなかったなー。普通に『おめでとう』って言うのかと思ってたのに」

「先生、根は優しい人だから。厳しさも、あの人なりの優しさ」

優しさとは、ただ優しくするだけではない。時に厳しく叱ることもまた、優しさの形の一つなのだ。

「それに、おかげで頑張らないと思って思えた」

「だね。先生たちの期待には応えないとね」

自分たちの中学校始まって以来の雄英合格者。当然、教師たちの期待も高まる。そんな彼らの期待に背く結果を出さない様、これからも日々精進しなければ。

「……響香」

「ん？ なに？」

不意に名前を呼ばれ顔を向けると、諸葉は真剣な表情をしております。

「頑張ろう、これから」

「……うん、がんばろ」

自分たちの目指す『ヒーロー』になるため。

少年少女は残りわずかなこの平穏に身を委ね、これから始まる過酷な日々への決意を固めるのだった。

6. 入学のち試練

季節は春。それは別れ、そして出会いの季節である。

諸葉の残り少ない中学校生活は今までと変わることはなく、慣れ親しんだ時間のまま過ぎ去っていった。

卒業し、それぞれの道を行かんとする級友達と別れ、諸葉もまた自身の進むべき道を歩き始める。

電車と徒歩を駆使すること数十分。メタリックな壁に挟まれた校門を通り抜け、広大な敷地を抜けた先にある巨大な校舎。そこにある1—Aと刻まれた教室の扉の前に年少少女はいた。

「ここがウチらのクラスか……てか扉でつか」

身の丈の何倍もある巨大な扉の前に、雄英の制服に身を包んだ響香は視線を上に向けつつ素直な感想を述べる。

「たぶん、バリアフリーみたいなものだと思う」

そんな響香の隣では同じく真新しい制服を着た諸葉が考えられる答えを口にする。

ヒーロー科というだけあり、多くの個性を持つ人に対応できる様にしてあるのだろう。巨大な体を持つ生徒が入学してきた場合など、普通の扉では学園生活に支障が出る可能性がある。

しかしそれを踏まえても大きすぎるといふ感想を抱くのが現実なのだが……。

とはいえ、このまま廊下で棒立ちしたままというわけにもいかない。諸葉は教室の扉に手をかけ横へスライド。思いの外扉は軽く、特に苦もなく開き終える。

これから通う新天地。この先には全国各地から集まったヒーローの卵、そのエリート達がいる。いったいどれほどの猛者が集っているのか。

期待に胸を膨らませながら潜った扉の向こう側。そこに広がる景色は——

「おはよう！ 俺は私立聡明中学出身、飯田天哉だ！ これから同じ

学び舎でヒーローを目指す者同士、ともに頑張ろう！」

「うお……びつくりした」

入室と同時に現れた一人の少年の顔。眼鏡をかけ、謹厳そうな顔立ちをした彼を諸葉は覚えている。入試の時の眼鏡君である。

自らを飯田天哉と名乗る少年の突然な自己紹介に驚く響香。諸葉は驚きこそしなかったが、目の前のクラスメートの独特な手の動きに視線を奪われる。

「辺須瓶中学出身、癒代諸葉。よろしく」

「ウチもこつちと同じ中学出身。名前は耳郎響香、よろしく」

「うむ、癒代くんは耳郎くんだな！ よろしく！ あと席は出席番号順になっているそうぞぞ！」

しゅばっ、とキレのいい動きで右手をあげると眼鏡の少年、飯田は別のクラスメート達に挨拶をしに行った。

のっけから印象の強い人に出会った二人。やはりヒーロー科の名門、一癖も二癖もありそうな人物が揃っていそうだと、胸中で同じ思いを抱く。

「ま、とりあえず自分の席に行こっか」

「……うん」

『じ』で始まる響香と『ゆ』で始まる諸葉。互いに席は離れてしまうので諸葉は響香と別れ自身の席——入り口とは反対側の列の最後尾に一つだけポツンと出た机へと向かう。

そして鞆を置き席に座り、ただ何も考えず教室の中の景色を呆然と眺める諸葉。同時にクラスメート達の顔や特徴も確認。

基本的に見た目は普通の人が多いが、数人程度『個性』の影響からかやや人から離れた姿をしている者も。中でも取り分け目を引いたのは、制服以外が何も見えない透明人間の少女。透明なのに人目を引くとはコレ如何に。

(やっぱり色んな人がいる……)

そんな特徴的なクラスメート達を眺めていると、自身の前の席に座る少女と視線が合う。

「お初にお目にかかります。わたくしほりすま私、掘須磨大付属中学校出身のやおよろずもも八百万百

と申します」

「辺須瓶中学出身、癒代諸葉。よろしく八百万……さん」

おでこが出るように長い髪を後ろで一纏めにした、どこか気品を感じさせる八百万と名乗る少女。ぱつと見『これ高一か?』と疑いたくなるようなプロポーションに加え、上品な口調がさらに大人らしさを助長させている。

どこか年上な雰囲気を感じさせるからだろうか、諸葉は無意識に八百万のことを『さん』付けで呼んでしまっている。

「あの、別に無理して『さん』付けしなくてもいいですわよ? 癒代さんの呼びやすいように呼んでいただいて構いませんわ」

「うん……^{あね}姐さん」

「あ、姐さん……?」

諸葉の呼び名に首を傾げる八百万。

「あの、姐さんとはいったい……?」

「……俺の師匠に、見た感じが似てるから」

「師匠、ですか?」

「うん……性格は真逆だけど」

「そ、そうですか……」

今の諸葉をここまで育て上げた彼の師匠。大人な雰囲気を醸し出す百はそんな師匠に少なからず似ており、諸葉はついつい八百万のことを『姐さん』と呼んでしまう。

しかし師匠の性格は諸葉の言った通り、上品な彼女とは真反対に位置するものであるが……。

「やっぱりやめたほうがいい?」

「い、いえ好きにお呼び下さいと言ったのは私の方ですから……お気になさらず」

「ん……そうする」

多少突っ込みどころも多いが、兎にも角にも自己紹介を終えた両名。

すると何やら前の方がやや騒がしくなり出し二人が騒ぎの元へと視線を向けると、そこでは飯田と薄い金髪の少年が何やら言い合いを

していた。

「机に足をかけるな！ 雄英の先輩方や机の製作者方に申し訳ないと思わないのか!?!?」

どうやら金髪の彼の座る態度が悪いらしい。諸葉の方からは背中しか見えないのでよくわからないが、話の内容から机に足を乗っけているということはわかる。

誠実な性格の飯田にとってそうしたマナーの悪い態度は見過ごせないらしい。語気を強くし注意をする飯田に対し、件の問題児である金髪の少年はというと

「思わねーよー・ てめーどこ中だよ端役が!」

この一言で性格がどれほど粗暴であるのかがわかる。ヒーローを目指す者ならば最低限度のマナーというものを守るべきなのだが……金髪の彼の言動はヒーローのそれとはかけ離れすぎている。

真面目な飯田と不良の金髪くん。二人が相入れることはなく言い合いを続けていると、がらがら……と、恐る恐るといった感じで教室の扉が開き一人の少年が入室してくる。

ふと、諸葉がそちらへ目を向けた瞬間、彼の視線はその少年に釘付けにされる。なぜなら入室してきたその少年は、先の入試で巨大仮想敵を殴り飛ばした0ポイントの少年だったからだ。

今でもあの日の光景は鮮明に残っている。恐れを振り切り、ただ誰かのために走り出した少年の背中。あの時、入試会場で誰よりもヒーローだったあの小さくも大きな背中が。

「そう、合格できたんだ……よかった」

「なにか仰いましたか?」

「ん……別に、なんでもない」

少年の入室に気づいた飯田は挨拶をするべく、金髪の少年から離れると彼へと近づく。そんな飯田にビクつきながら自己紹介をする少年に、今度は背後から現れた茶髪のショートボブの少女が笑顔で挨拶をする。

彼女もまた印象に残った人物の一人で、なにやら奇妙な縁じみたものを感じる諸葉。楽しそうに、また嬉しそうに話しをする女生徒に対

し、少年は顔を赤くさせしどろもどろになりながら返事を返す。

わいわいと、入り口で談笑する二人を真反対の位置からぼうっと眺める諸葉。すると突如、二人は話しを中断しある方向——扉の下部分へと視線を集中させる。

何事か、と引き続き二人の行動を眺めていると、全身を寝袋で包んだ無精髭の男が入室してきたではないか。そんな不審者じみた男の登場に教室の空気が静まり返る。

「はい、静かになるまで8秒かかりました。時間は有限、君たちは合理性に欠くね」

寝袋を脱ぎながらそう発言する男。

いったい何者なのか、生徒たちが怪訝な視線を向ける中、続けて男は口を動かす。

「担任の相澤消太だ。よろしくね」

担任、相澤と名乗る男の発言に驚愕する生徒たち。それもそうだが、彼の格好は上下黒の服、そして首元に巻いた包帯のような布。そして散髪も行っていないであろう伸ばし放題の髪に、同じく放置された無精髭。

担任というには些か清潔感が欠如している。

「担任という割にはその、なんとというか……少々格好がだらしない方ですわね」

「少々じゃなくて、だいぶでいいよ姐さん」

「あ、その呼び名で決定なのです……」

どうやら固定されたらしい八百万の呼び名。苦笑いをする八百万だが、諸葉は相澤に視線を向けているためそれに気づかない。

そして諸葉の視線の先、件のだらしない担任の相澤はというと、なにやら寝袋を漁りその中から雄英指定の体操服を取り出す。話しを聞くに、どうやら今から体操服あを着てグラウンドへ行かなければならないらしい。

すぐ後に入学式が控えているというのになぜそんなことをするのかは謎だが、担任の言うことなので諸葉たちは指示に従い体操服に着替えグラウンドへと向かうのだった。

相澤^{担任}の指示通り、諸葉含む1年A組の面々は体操服へ着替えグラウンドへ集合する。

全員が集まったのを確認した相澤は、その気だるそうな目で生徒たちを見据えると

「それじゃ、今から君たちには『個性把握テスト』をやってもらおう」

「個性把握……!?」

「テストオ!?」

入学式やガイダンスなど放つたらかして行われる『個性把握テスト』なるものに驚きを隠せないクラスメートたち。おうむ返しで叫ぶ彼らを気にもとめず、相澤は背中を向け話を続ける。

「ヒーローになるならそんな悠長なものに出ている暇はないよ」

相澤曰く、雄英は『自由』な校風が売り文句で、それは教師側にも当てはまるらしい。つまり今回の入学式そっちのけのテストも、その校風に則って行われたものだということ。

しかしあまりにも『自由』の度合いがすぎないかと疑問を抱く諸葉だが、郷に入っては郷に従えの精神でそれを受け入れる。

「それじゃあ今からテストの概要を説明するぞ」

これから行われるのは『個性』を用いた体力テスト。中学校までは個性禁止で行われてきたそれだが、相澤曰く合理的ではない文部科学省の怠慢により作られたものらしい。

自分の『最大限』を知ること。それがヒーローの素地を形成する合理的手段だと相澤は述べる。

手本として相澤は金髪の粗暴な少年——爆豪へソフトボールを投げ渡す。どうやら彼で実演を試みせるらしい。

ボールを受け取った爆轟はソフトボール投げの円の中へと入り、大きく振りかぶると

「死ねえー」

彼の個性であろう爆風を球威に乗せ投擲。個性を使用したことで飛距離を大きく伸ばしたボールは瞬く間に見えなくなり

「……705. 2m」

相澤の手元に握られた機械がその飛距離を示す。その距離は個性を使わなかった中学の頃に比べて格段に上がったのは目に見えてわかる。

自由に個性を使えるテストに気分を良くしたクラスメートたちはわいわいと、楽しそうにはしゃぎだす。中には『面白そう』と発言する者もあり、その発言を耳にした相澤は項垂れると

「君たちはヒーローになるための3年間そんな腹づもりで過ごす気であるつもりかい？」

見るからに落胆した雰囲気を漂わせる相澤に、はしゃいでいた生徒たちは静まり返る。逆鱗に触れた、自分たちへ虚ろな瞳を向けてくる相澤を見て諸葉はそう確信する。

「よし、トータル成績最下位の者は見込み無しとし『除籍処分』としよう」

続けて相澤が口にした発言に生徒たちは固まる。入学初日、ヒーローの卵としての輝かしい一步を踏み出すその日に除籍など笑えたものではない。

険しい表情をする生徒たちを見て、なにが楽しいのか相澤は不敵な笑みを浮かべ

「生徒の如何は先生おれたちの自由。ようこそこれが雄英高校ヒーロー科だ」

高校生活1日目から与えられた大試練。ある者は表情を不安に染め、またある者はその発言の内容を汲まんと思考し、またある者は与えられた試練に笑みを浮かべる。

そんな生徒の反応を見て、髪をかきあげ笑みを浮かべる相澤。そんな彼の発言は『理不尽』の一言に尽きるが、世の中とはそもそもが理それら不尽の塊である。

いつ起こるか分からない人災・天災。それらを乗り越える力と強靱な精神を持ち、人々を救った者がヒーローと呼ばれるのだ。

「Plus Ultra」——さらに向こうへ、降りかかる理不尽など吹き飛ばし自らの糧へと変えろ。

「これが君たち最初の壁だ。さあ卵たち——全力で乗り越えて来い」

相澤の一言に生徒たちの表情は真剣なものへと変化する。諸葉もまた、無意識に拳を握る手に入る力が増す。

そして少年少女たちは最初の試練を乗り越えるため、一歩足を踏み出す。

7. 個性把握テスト

入学初日から突きつけられた試練。

第1種目の50m走を行うため、諸葉たちはスタートレーンへと向かう。

「雄英まじか……いくらなんでも除籍ってやりすぎじゃない？」

諸葉の隣を歩きそうぼやく響香の表情は暗い。それもそのはずだ、入学初日に自身を含めたクラスメートの中の誰かが『除籍処分』を下されるのだから。

諸葉も相澤のやり方は些か度が過ぎているとは思うが

「それでもやらないといけないなら、やるだけ」

これが彼のやり方だというのなら乗り越えるだけだ。腐つても彼も雄英の教師の一人、ならばこの試練にも何かしらの意味があるはずだ。

ただ当然、諸葉にも不安がある。彼の個性はこと戦闘には不向きなもの、それはつまり体力テストにも向いていないと同義。仮に『代傷』^{だいしょう}のもう一つの力で身体能力を上げるにしても、まずは傷を負うまたはそれなりの怪我を治癒しなければならない。

現段階において、諸葉自身は無個性であるのと同義なのだ。そんな状態で個性を持つものたちと渡り合わなければならぬのは、はつきり言って辛い一言に尽きる。

「ウチの個性も向いてないし……ちよつとまずいかも」

響香も自身の個性がこのテストに向いていないことを理解しており、表情を不安一色に染める。

そんな幼なじみを励ますため、諸葉はその小さな肩に優しく手を置き

「ヒーローはそんな顔はしない。大丈夫、最後までやりきろう」

「……うん」

少しだけだが表情を和らげる響香。そして諸葉もまた、気合いを入れなおす。

そして振り返り、少し後ろを歩くあの地味な少年へ視線を向ける。

彼の顔は青ざめており、まさにこの世の終わりに直面したかのようにだ。一度だけ見た彼の個性。使えば体を壊す超パワー、自然と使い所が限られてくるだろう。

今の諸葉に他人の心配をしている余裕などない……だがそれでも無視はできない。

そんな少年のことを考えながら、諸葉は第一種目へと向かうのだった。

——第一種目『50m走』

「それじゃあ最後、峰田^{みねた}・八百万・癒代の三人。位置に付け」

相澤の指示に従いスタート地点へと向かう諸葉。

「なあおい、癒代」

すると不意に背後から声をかけられ振り返ると、そこにいたのはかなり小柄なボールのような髪が特徴的な少年だった。おそらく彼がこれから一緒に走る峰田と呼ばれた少年なのだろうが、いったい何の用があつて話しかけてきたのか。

諸葉が返事を返すと、峰田は視線を自分たちより前を歩く八百万へと向け

「お前、八百万を見てどう思うよ？」

「……どうって、なにが？」

「決まってるんだろ！ あの豊満なおっぱい、いや『ヤオヨロツパイ』を見てどう思うって言ってるんだ！」

「……頭、大丈夫？」

除籍がかかったテストだというのにこの少年はなにを言っているのか。本気で心配した諸葉は言葉をかけるが、峰田の耳には届いておらず

「体操着越しであのポリウム……なに食ったらあんな育つんだよ。それに他の女子も負けず劣らずのプロポーション……さすが雄英だぜえ……」

涎を垂らし目をかっぴらく峰田に、諸葉は何を言っても無駄だと悟

りさつさとその場を去る。たった二言言葉を交わしただけだが、諸葉は早速峰田という少年を理解した。彼はまぎれもない、性欲の権化である。

峰田を無視しスタートラインへとたどり着く諸葉。その隣にはすでに準備を整えた八百万がなぜかバイクに跨っていた。

「……どうしたの、それ」

「私の個性で創りましたの。ちゃんと免許も持っていますし、運転しても問題はないですよ?」

「……そう」

八百万 百、個性『創造』。生物以外ならなんでも作り出すことができる個性だ!

普通なら50m走でバイクは突っ込みどころ満載だが、これは個性把握テスト。あくまでも『個性』の汎用性や限界を知るテストだ。ならば個性で作り出したものを扱っても何の問題もないのだろう。事実、相澤も何も言っではこない。

少し変わった競争相手に若干戸惑いつつも、スタートブロックに足をかける諸葉。いつの間にか峰田も準備を整えていた。

「よーい……スタートー!」

そんな声を合図に諸葉はブロックを蹴りスタートを切る。少し遅れて峰田、そしてエンジンを吹かせ八百万の順でスタート。

風を切り全力で走る諸葉。その速度は並の速さではなく、あつという間に峰田を置き去りにしてしまう。

「お速いですね。ですが、甘いですよ!」

「っ! 姐さん……」

有無を言わさず近づいてくるエンジン音と八百万の声。チラリと後ろに目を向ければ、すぐ背後にバイクに乗った八百万が迫っており、そのまま諸葉を抜き去りゴールする。

遅れて諸葉、そしてさらに遅れて峰田の順でゴールイン。

「5秒4……まあまあかな」

「くっそお八百万! なんでバイクなんだよ、走れよ! 揺れる胸を、ユレヨロツパイを見せろよ!」

クソな発言をする峰田を軽くスルーし、諸葉は次の競技へと移る。

第二種目『握力』

握力は至って普通の62kg。

測定を終わらせた諸葉は例の地味な少年へと目を向ける。彼は目を閉じ、何かイメージするように握力測定を行っていた。

しかし結果は彼の望んだものには至らなかつたようで、どこか悔しさと焦燥を感じさせる面持ちで次の競技場所へと移動していった。

ちなみにだが、540kgもの記録を叩き出したものがある。さすがは雄英入学者、個性を使えば常人を超える結果などたやすく出せるというわけだ。

第三種目『立ち幅跳び』

立ち幅跳び、こと脚力には自身がある諸葉。両脚に力を込め、頭の中で最高のタイミングで飛んだ自分をイメージする。

そしてイメージと自分の動きが重なった瞬間、諸葉はその場を大きく跳躍する。目測でも優に2mは超えているであろうその跳躍に、隣のレーンで飛んだ峰田はまたも驚かされる。

結果は3m5cm。無個性の男子高校生の平均2m22cmを超える大記録である。ただ個性を用いた他の生徒達に比べれば見劣りする結果ではあるので、諸葉はこの結果に満足することなく次の競技へと移った。

第四種目『反復横とび』

ここではまさかの峰田が水を得た魚の如き活躍を見せた。

彼はボール状の髪の毛をむしり取ると外側二つの線へそれぞれ10個ずつ設置。髪の毛は崩れることなく、まるでくつつくかのようになり重なり合い峰田の体ほどの壁を作り出す。

峰田実、個性『もぎもぎ』。彼のボール状の髪の毛は何にでもくつつき、体調次第では1日くつついている場合もあるぞ！ しかも自分にはくつつかずプニプニ跳ねる。もぎった側から生えてくるが、もぎ

りすぎると血が出てしまうのが欠点だ！

峰田は自身の個性の特徴を生かし、髪の毛をまるでトランポリンのごとく利用し素早い動きで反復横とびを行う。さすがの諸葉も峰田の動きにはついてはいけず、結果は峰田が107と驚異の数値を叩き出した。

第五種目『ボール投げ』

これは最初に爆轟が見せたように、個性を用いてどれだけ飛距離を叩き出せるかが鍵となってくる。

ここでは茶髪ショートボブの少女——麗日うららかにお茶子ちやこが『∞』という規格外の数値を叩き出した。彼女の個性は『無重力』、指先の肉球で触れたものの引力をゼロにし浮かせることができる個性だ！

入試の際、彼女の個性が『浮かせること』であることを知っていた諸葉は特に驚いてはいないが、やはり一人一つは突出した何かを持っている状況に多少の焦りを感じる。

次々とボール投げを終わらせていく中、ついに出番は地味目の少年——相澤が言うには緑谷というらしい——へと回ってくる。今までの彼の結果を遠目から見てきたが、やはり彼も自分と同じく突出した何かを持つてはいなかった。

自分の体を壊してしまうほどの超パワーだ、やすやすと使えない上にあの痛みに飛び込むには相応の覚悟がある。しかし残す種目は長座体前屈に持久走、そして上体起こしの三つ。はっきりいってこれらの種目に力はいらない。

つまり彼が結果を出すのならばこの種目しかないのだ。緑谷もそれを理解しているらしく、その表情は覚悟を決めたものになっている。

「緑谷くん……このままだとまずいぞ」

「たりめーだ！ デクは無個性のザコだぞ！」

「なに、無個性!?? 彼が入試時になにを成したのか知らんのか!??」

後ろで会話する爆豪と飯田。その話の内容に耳を傾けていた諸葉も、爆豪の言葉に我が耳を疑った。爆豪は緑谷が無個性だというのが、

それはないと諸葉も内心で異を唱える。あれほどの超パワー、増強型の個性で間違いはない。

二人の会話を聞いておきたいが、緑谷がボール投げを開始するので意識をそちらへ集中。きつと彼はここであの超パワーを使うはず。そうなれば彼が無個性ではないということが爆轟にも伝わるであろう。

そして緑谷が振りかぶり、例の超パワーでボールを投げた——と思いきや、ボールはわずか手前46mの地点へと落下する。

その結果に諸葉は驚くが、一番驚いていたのは投げた緑谷本人であった。自身の腕を見つめ、信じられないといった表情を浮かべる緑谷へ、相澤が言葉をかける。

「個性を消した。つくづく合理性に欠けるよあの入試は……お前のような人間も入学出来てしまう」

そう言いながら緑谷へ近づくのは、髪の毛を逆立て赤くなった瞳を向ける相澤であった。首に巻いた布の下からは黄色いゴーグルが姿を見せ、彼の発言とゴーグルから緑谷はその正体を察する。

「消した……そしてあのゴーグル……そうか！ 『抹消ヒーロー』 イレイザーヘッド！」

相澤消太、個性『抹消』。視た者の個性を消す個性だ！

彼はプロヒーローだが仕事に差し支えるとしてメディアへの露出を嫌っている。ゆえに彼のヒーロー名を聞いてもピンとくる生徒は少なく、少ないヒントで彼の正体を突き止めた緑谷はヒーロについては相当な知識を有しているのだとわかる。

「見たところ個性を制御できないんだろ？ また行動不能になって誰かに助けてもらおうつもりだったか？」

「そ、そんなつもりじゃ……」

「どういいうつもりでも、周りはそうせざるをえなくなるって話だ」

首に巻いた布で緑谷の体を拘束、自身の元へと引っ張る相澤。その途中相澤は視線を緑谷から外し、傍観に徹する生徒の中の一人、諸葉へ視線を向ける。

「昔、暑苦しいヒーローが大災害から一人で千人以上を救い出すとい

う伝説を作った」

その伝説は諸葉も知っている。それはかつてオールマイトが作り出した伝説で、今もネットの動画ではその救出劇が流されている。

それが生ける伝説、No. 1ヒーローオールマイトの輝かしいデビューであった。

「同じ蛮勇でもお前は一人を助けて木偶の坊になるだけ。緑谷出久、お前の『力』じゃヒーローにはなれないよ」

ヒーローとは人々を助ける存在。そんなヒーロが一発殴って行動不能となつては、助けられる者も助けられない上被害を広げるおそれすらある。

自分の体が無事であること、それが人を助けるヒーローとしての大前提なのだ。

「個性は戻した。ボール投げは二回だ、とつとと済ませな」

そう言い、相澤は緑谷へボールを手渡す。

これがラストチャンス。相澤の言いつけを破り腕を壊しても、萎縮し個性を使わず最下位になっても除籍は免れない。

緑谷は青ざめた表情で円の中に入り、なにやらぶつぶつとつぶやいている。何か策を考えているのだろうか、個性なくして彼が大記録を狙えるはずがない。であるなら、彼が取る行動は個性を使った大投擲。

予想通り、緑谷は大きく振りかぶり力強いモーションでボールを投げる。そんな緑谷に相澤は落胆の表情を浮かべるが、緑谷が投げながら何かぶつぶつと呟いているのに気付く。

「……最大限で……最小限に——今！」

緑谷の手から放たれたボール。それは先ほどの結果が嘘のような勢いで宙を貫き、遙か彼方へとその姿を眩ませる。

まるで別人が投げたかのような結果に、諸葉や飯田に麗日といったあの入試を受けていたメンバー以外のクラスメートたちは度肝を抜かれる。

「あの痛み……程じゃない！ 先生……まだ、動けます!!？」

右手の人差し指を腫れ上がらせた緑谷はその激痛に目尻に涙を浮

かべるが、確かにあの入試の時と違って手も足も十分に動かせる状態だ。

最小限の負傷で最大限の力を……これが緑谷の相澤に対する答えであった。緑谷の予想外の行動に相澤はこのテストで初めて生徒たちに笑顔を見せる。

緑谷出久——記録『705. 3m』

8. 個性把握テストI

「やっとヒーローらしい記録出したよー!」

「指が腫れ上がっているぞ……入試の件といいおかしな個性だ……」

緑谷の大記録に麗日は両手でガッツポーズをし大喜びし、その隣で飯田が緑谷の怪我を見てその個性のちぐはぐさに疑問を抱く。

「すっご……増強系だと思っけど、それにしても飛びすぎじゃない?」

諸葉の隣に立つ響香は緑谷の大投擲にあんぐりと口を開け、信じられないといった表情を浮かべている。だが諸葉は彼が個性を使えばこの記録を出すことができるかと知っていたので、別段驚きはしないが一応相槌だけは打っておく。

「ただやっぱり、使った反動が大きすぎる」

「反動って……てかあの指、絶対骨折れてるでしょ」

緑谷の個性はまさに諸刃の剣だ。常人をはるかに超えるパワーを引き出す代償は自身の体で、個性を発動した右手の人差し指の骨は砕け赤く腫れ上がっている。

諸葉もまた、彼と同じく自身の体を傷つけるリスクを持った個性を有している。だからだろうか、諸葉は胸の中で考える。緑谷がその激痛に飛び込んでいける理由、彼の背中を押す何かを。

緑谷の大記録に他の面々が驚愕する中、一人の男が集団から抜け緑谷へと向けて駆け出した。

「どーいうことだコラ! ワケを言えデクてめえ!」

掌を爆破させながら怒りをあらわにする爆轟。鬼の形相を体現したかのような表情を浮かべた爆轟は、怒りのままに緑谷へ襲いかかるも相澤により個性を消され捕縛。

衝動のままに駆け出したのだろう、担任に注意を受け幾分か冷静になった爆轟だが、それでも緑谷へ向ける視線には憎悪にも似た何かが含まれていた。

爆轟の襲撃を逃れた緑谷がクラス集団の元へ戻ると、彼の怪我を心配した麗日が駆け寄り声をかける。

「指 大丈夫? すっごい腫れてるけど……」

「あ、うん大丈夫……痛う！」

「全然大丈夫じゃないじゃん！ 保健室行ったほうがいいって！」

「でも、まだ残りの種目が……」

「そんな怪我じゃ満足にできんって！ 一旦保健室にいこ、ね？」

怪我をした緑谷を保健室へ連れて行こうとする麗日。確かに今の緑谷の状態では残りの種目を満足に行えるはずもない。しかしそれ以上に緑谷が懸念しているのは、怪我を理由にテストを抜けたことで最下位になってしまうということ。

この怪我は不慮の事故ではなく、こうなるのを覚悟した上で負つたものだ。つまりは自己責任、このまま最後までやり通すのが最善だと緑谷は考える。

そんな緑谷に麗日はそれ以上何も言わないが、依然心配そうな表情を浮かべている。するとそんな二人の元へ歩み寄る一つの影が。

「……怪我、ちよつと見せて」

「え？」

その影の正体は響香の元を離れた諸葉だ。緑谷からしてみれば面識のない人物からいきなり声をかけられたも同然で、戸惑いつつも右手の怪我を見せる。

「あ、あの……君は？」

「癒代 諸葉……よろしく」

「あ、僕はみ、緑谷 出久……よろしく癒代くん」

自己紹介をしながら怪我の状態を見る諸葉へ、緑谷は何をしているのか不思議そうな視線を向け問いかける。

「あ、あの……何してるの？」

「……うん、これくらいなら大丈夫」

「へ？ 大丈夫って、何が……」

一人で頷く諸葉へ緑谷はさらに問いかけるが、それを無視して諸葉は個性を発動させる。緑谷の怪我に触れた手から白い光が漏れ、数秒も経たない内に彼の右手を覆い尽くす。

突然の現象に緑谷は目を見開かせ驚くが、次第に指の痛みが小さくなっていくことに気づく。光が消える頃には人差し指の腫れはほと

んど引き、痛みも動かす際に多少痛い程度まで治った。

ふう、と息を吐き諸葉は緑谷から手を離す。

「これで、残りの種目も大丈夫」

「え、あ、うん……あ、ありがとう」

「それじゃ、次 俺の番だから」

そう言うのと諸葉はボール投げを行うべく緑谷から離れ指定の場所へと向かう。怪我が殆ど治った緑谷は、遠ざかる背中と人差し指を交互に見比べる。

最下位は除籍。周りは皆ライバルだというのに、諸葉のとった行動はそのライバルを手助けするものに他ならない。なぜわざわざそんなことをしたのか、緑谷は諸葉の行動に疑問を抱く。

「いやーやつぱりすごいなあ、あの人の個性」

「麗日さん、知り合いなの？」

「え？ ううん、入試の時たまたま会っただけで……ていうか、覚えてないの？」

「入試のときはその……ショックで気絶したから記憶がなくて……」

0ポイントで終わった実技試験。ショックのあまり気絶をしてしまった緑谷はその後何が起きたのかを知らない。

しかしこの一部始終を見ていた麗日は、少し言いづらそうに口を閉ざす。そんな麗日の反応に緑谷は疑問を抱くが、言いにくいことを無理に言わせるのも悪いと話を終え、諸葉のボール投げへと意識を向ける。

緑谷が競技へ意識を切り替えたのを見て、麗日は彼に聞こえないようにぼそりと呟く。

「言えるわけじゃないやん……君を治して全身から血い出したなんて」

視点はボール投げに挑む諸葉へと変わる。

緑谷を治癒した諸葉はボール投げを行う為、円の中へと足を踏み入れる。そして相澤からボールを受け取り、早速測定を行おうとした直前

「入試といいさっきの緑谷といい、お前は怪我した奴ら全員をそうやって治していくつもりか？」

ぼそりと、諸葉にだけ聞こえるように問いかける相澤。その問いに視線を相澤へ向けると、彼の気だるそうな瞳と視線が重なる。

「お前の個性は大勢の人間を治せるほど万能じゃない。考えなしに使っていけば緑谷あいつのように動けなるのがオチだ……それは入試の時に実感しただろう」

許容限界がある諸葉の個性は、相澤の言う通り多くの人の怪我を治すことはできない。程度にもよるが、救える人数に限界があるのは紛れもない事実。

もしも身の丈に合わない人数を救おうとすれば、先に諸葉の体が限界を迎える。それは先の緑谷のように『行動不能でくのぼう』になるということ。「誰にでも手を差し伸べる心は立派だが、治すべき人間とそうでない人間の見分けはつける。じゃねえと本当に救いたいもん取り零しちまうぞ」

言いたいことを言い終えた相澤は元の位置へと戻る。相澤が離れたことでボール投げへと挑む諸葉は、頭の中で彼の言葉を反芻していた。

見分けをつけるというのはつまり、救う人とそうでない人の線引きをするということ。それは諸葉の掲げる信念を、目の前で救える人を助けるという信念を曲げると同義である。

しかし相澤の言うことがもつともだというのもまた事実。諸葉の個性のデメリットを考えれば、多くの人を救う為にはそうしたある種のふるいふるいにかけなければならぬ。

ただそれを素直に受け入れられるほど諸葉は大人ではない。まだまだ未熟な、ヒーローの卵になったばかりの子供なのだ。これからヒーローとは何かということを学び、体感し、時に壁にぶち当たり乗り越えることで成長していく。

(俺にはまだ、先生の言ったことが正しいのかわからない。でもこれだけははつきりとわかる)

ボールを握る手へ力を込める。すると利き腕である右手を淡い光

が包み込んでいく。

この光こそ、諸葉が誰かを助けたという証。そしてこの証が諸葉にさらなる力を与える。

構え、振りかぶり、力いっぱい投擲する諸葉。ボールから手を離す直前までイメージするのは、諦めず今の自分の最大限を出し切った緑谷の姿。

（俺が緑谷を助けたことは、間違いなんかじゃない！）

それだけ誰になんと言われようと変えるつもりはない。

諸葉の手を離れたボールは、彼の個性で強化された腕力により常人をはるかに超えた勢い、そして速度で空を切り裂いていく。

数秒後、相澤の手元にある機械が飛距離を計測。記された数字は『155.3m』。相澤は計測機が叩き出した数字に目を向けた後、結果を問うように自分を見る諸葉へ視線を移す。

（実技試験の終盤、やけに動きが良くなったと思ったら……こいつ能力を隠してやがったな）

学校へ提出する個性届。相澤が目を通したそれに書かれていたのは『他者の傷を癒し、それを自身が引き受ける』という内容だけ。今の様な『力の増強』というものについては一切触れられていなかった。確かに個性を隠すことによって得られるアドバンテージは大きい。しかし学校側にすら隠すというのは些かやりすぎとも言える。

相澤は試験での映像を頭の中で流し、諸葉の隠していた能力の発動条件を推測する。

（発動条件はおそらく『個性での治癒』……なら緑谷の傷を治したこと
も納得がいく。見たところ、^{リスク}負傷に対する^{リターン}肉体強化の方が大きい）

だがそれは緑谷の負傷が最低限であったから。もしも入試の様に腕一本を犠牲にしていたのなら、結果は今とは違っていたのかもしれない。

（依然多用はできないが、得られるメリットは確かにある……もうしばらく様子を見るか）

メリットを最大限に生かす個性の使用。もともと身体能力は高い諸葉に、対応力・思考力の高い緑谷。今以上にうまい個性の使い方を

知れば二人とも一気に化けるだろう。

互いにリスキーな個性を持つ緑谷と諸葉……少々心配だが、一応の見込みはあると相澤は判断を下す。

「そんじゃあと一球、さっさと投げろ」

後はこのテストをさっさと終わらせるだけ。相澤は諸葉へ次のボールを渡し、二度目の測定を無言で眺める。

そして時間は全種目終了後まで飛ぶ。

「んじゃぱぱっと結果発表するぞ。トータルは単純に各種目の評価点を合計した数だ。口頭での発表は時間の無駄なので一括で開示するぞ」

説明をする相澤の前に集合した生徒達。その中で一際 険しい顔をしているのは、ボール投げ以外。パツとしない結果の緑谷だった。

諸葉のおかげで怪我の痛みを気にすることなく全種目を終えることができたが、それでも個性を活用した他のクラスメート達に比べれば数歩以上劣っているのは明らか。

最下位は自分だと理解している緑谷は結果が表示されるその時を、胸が張り裂けそうなほど跳ねる心臓の音を感じながら待つ。

「ちなみに除籍はウソな。君たちの最大限を引き出す合理的虚偽」

結果の開示とともに相澤はそう口にする。告げられた事実には、彼の言葉を信じていた大多数はこれでもかと呼び

「あんなのウソに決まってるじゃない。少し考えればわかることですわ……」

「そゆこと……これにて終わりだ。教室にカリキュラムなどの書類があるから目え通しておけ」

そんなクラスメート達に八百万は、やれやれ、といった口調で告げる。

衝撃的な事実には、除籍を覚悟していた緑谷は口をパクパクとさせ

「緑谷、一応リカバリーガールのところ行ってこい。ついでに癒代、お前もだ」

そんな緑谷と開示された結果をぼうっと眺めている諸葉へ保健室
利用書を手渡す相澤。

それを受け取った諸葉と緑谷は互いに視線を合わせ

「……とりあえず、行く」

「う、うん……！」

相澤の指示に従い、二人で保健室へ向かって歩き出した。

こうして1年A組の少年少女達は最初の壁を乗り越えたのだった。

9. 『癒代と緑谷』

個性把握テストを終え、相澤の指示のもと保健室へと向かった諸葉と緑谷。当然出会ったばかりの二人の間に会話はなく、緑谷は若干気まずそうにしながら廊下を歩く。対して諸葉は特に気にした様子もなく、口を真一文字に閉じ足を進める。

(うう……なんか気まずいなあ)

緑谷はチラチラと気づかれないように横目で顔を伺うが、件の青年は一瞥もすることなくただまっすぐに前だけを向いている。非常に話しかけづらい。

ただ緑谷には先ほど傷を治してもらった礼がある。気まずいからといってそれを蔑ろにすることはできないと、意を決して口を開いた。

「あ、あのっ、癒代くんー！」

「……………ん？」

緑谷が言葉をかけることで初めて諸葉は視線を前から横へと移す。自身の目が彼の夜空のように澄んだ黒い瞳と重なり、思わず言葉を詰まらせてしまう緑谷。

飯田のような体格からくる威圧でも、爆轟のような荒々しい威圧などではない。ただ視線が重なっただけだというのに、緑谷は次の言葉を失ってしまった。

「……………なに？」

「あ、ご、ごめん！ その、ボール投げの時のお礼が言いたくて……………ありがとう」

「ああ……………別にいいよ。そういう『個性』だから」

傷を癒す個性で傷を治す。治癒システムの個性を持つ身として当たり前のことをしたまでのこと。

諸葉の言葉に幾分か気持ちが軽くなった緑谷はここぞとばかりに会話を広げる。

「それにしても癒代くんの『個性』凄かったよ。あつという間に傷も痛みも引いて……………プロになったらいろんな場面で活躍しそうだね！」

「うん、ありがとう」

「でも治癒系統ってことはやっぱりリカバリーガールみたいな救護系になるよなくああでも癒代くん個性把握テストでも8位だったから身体能力もかなり高いだろうしたぶん現場での活躍もできそうだなあそれに身体能力でいうとボール投げでのあの記録はちよつと疑問が残るといふかあれだけの記録は増強系じゃないとそうそう出せないしだとすると癒代くんの『個性』っていったい……」

ぶつぶつと顎に手を当てながら独り言をつぶやく緑谷。内容を聞くに諸葉の個性について分析をしているようだが、いかんせん見た目が怪しさ全開すぎる。

緑谷の奇妙な行動に一瞬面食らう諸葉だが、すぐに我に帰ると未だ独り言を漏らす緑谷へ声をかける。しかしよほど集中しているのか、2・3度の呼びかけでやつと緑谷の耳に声が届く。

「あ、ごめん……『個性』とかヒーローのことになるとつい夢中になっちゃって」

「大丈夫……少し驚きはしたけど」

だが彼が周りも見えなくなるほどにヒーローが好きだということもは伝わった。きつとそれほどまでにヒーローというものに対する憧れが強いのだろうと、緑谷に対するある程度の印象を固める諸葉。

「あの一つ質問いいかな？ 癒代くんの『個性』っていったいどういうものか知りたくて……」

「い、いよ」

諸葉は緑谷へ自身の『代傷』^{だいしょう}の能力の説明を行う。ただ緑谷の性格上、傷を引き受けるデメリットがあることを話したら面倒くさいことになりそうなのでそこは省略し掻い摘んで説明する。

諸葉から『代傷』の能力についての説明を受けた緑谷は、先ほどと同じく顎に手を当て

「傷を治して力を増強させる……やっぱり凄い『個性』だね。複合型でもかなり珍しい組み合わせだし、プロでも十分に通用する『個性』だよ」

「ん、ありがとう」

「でも傷を治すって条件がある以上負傷者がその場にいることが大前提なわけでだとすると負傷者を庇いながらの戦闘を視野に入れないといけないわけかそうすると多対一の状況での戦闘は厳しいから活躍する現場は一对一の場合か災害とかの救助活動になるよなあ」

「またも行われる緑谷の独り言。しかし話を聞くにしっかりと射ているし、これほど頭が回るのはさすがの一言しか言えない。」

「緑谷の『個性』も珍しい。指一本であそこまでの力はそうそう出せない」

「あ、あはは、その代わり指がボロボロになっちゃったけど……。そのことで相澤先生にも怒られちゃったし、もっと上手く扱えるようにしないといけないなあ」

「そういえば、と緑谷は何かを思い出したのか諸葉へ視線を向け

「癒代くんも相澤先生に何か言われてたよね？」

「あああれは……。緑谷を甘やかすなって言われただけ」

「そ、そうなんだ……。なんかごめんね、色々迷惑かけちゃって」

「別に、個性把握テストなんだから俺がどう『個性』を使おうが勝手」
「本当は違うのだが、それを言ってしまうと諸葉の『個性』の実態を感じかれてしまう恐れがある。しかも緑谷はそういう面では相当頭がキレる、どんなボロが答えにたどり着くのかわからない。」

「いずれはばれてしまうことだが、諸葉自身このデメリットについては自分で口外するつもりはない。それにもしもバレてしまえば『個性』を使うのを断られる可能性もある。」

「そんな話をしていいる間に保健室の扉の前へと到着する二人。ノックをし中の人物からの入室の許可をもらい扉へ手をかける。」

「失礼します、1-Aの緑谷です」

「1-Aの癒代です」

「とりあえず適当なところに腰掛けな」

机の前、そこに座っていたのは一人の老齢の女性。白衣をまとい、お団子頭にした髪を止める注射器が特徴的な彼女は看護教諭のリカバリーガールだ。

「諸葉と同じく他者を治癒する『個性』を持つ、雄英高校の屋台骨と

まで言われるヒーローである。

「まったく、入学初日だったのにこんなところに来るんじゃないよ」

「す、すいません……」

「二人はA組だったね。まあ大方イレイザーヘッドの洗礼を受けたんだろうけど……にしても何をやらかしたんだい？」

ため息をつき緑谷の話を聞きリカバリーガール。そして内容を聞き終えた彼女は緑谷の右手へ視線を向け、顎に手を当て現在の状態を確認する。

「緑谷出久、あんたの『個性』は知ってるよ。入試の時も相当やらかしてたからね」

「はい……」

「そして癒代諸葉あんたもね。あんたたち二人、ある意味有名になってるよ」

おそらくそれは入試の時の緑谷を治癒した時のことだろう。確かに血を嘔き出されては覚えるなというほうが無理な話である。

ただ入試最後の記憶がない緑谷は首をかしげ隣の諸葉に視線を向ける。

「まあそれは今は置いてくとして……緑谷出久、怪我を見せてごらん」

「あ、はい」

リカバリーガールの指示を受け、右手を彼女の見やすい位置に動かす緑谷。そしてリカバリーガールが差し出された右手、その人差し指へ観察するように視線を送る。

「だいたい1分ほどだろうか、リカバリーガールは緑谷の手から視線を外す。」

「この程度だったら私の『個性』は必要ないね。ただちよつと固定だけしておこうかい」

そう言い、リカバリーガールは緑谷の人差し指に包帯を巻く。キュツ、と最後に包帯を結び手当は完了。

「これでよし。次はあんたなわけだけど……」

諸葉へと目を向けるリカバリーガール。その視線は何処か鋭いもので、その理由を察した諸葉はたまらず目をそらす。

なぜ諸葉へ厳しい視線を向けているのか。その理由がわからない
緑谷は、不思議そうな表情で二人へ交互に視線を向ける。

時間にして10秒にも満たない僅かな間。するとリカバリーガ
ーは、ふう、とため息を吐きやれやれといった表情を浮かべる。

「見たところ怪我はないようだね。なら私にできることはないし、
さっさと教室に戻りな」

「……はい」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

保健室を後にする諸葉と緑谷。

教室へ向けて足を進める中、先ほどの二人のやりとりを疑問に思っ
ていた緑谷が口を開く。

「あの癒代くん、リカバリーガールとその……何かあったの？」

緑谷の質問に諸葉は口を真一文字に締め、どう答えようか内心で考
える。

——諸葉がリカバリーガールに出会ったのは入試の実技試験の終
わり。緑谷の怪我を治癒し、自身が身体中から鮮血を流した時であ
る。

『傷は見た目が酷いだけだけど、程度で言ったらそこまで酷いもん
じゃないから安心しな。問題があるとしたらあなたの体の方さね』

治癒を施して貰い、傷をほとんど治してもらった諸葉。だがリカバ
リーガールはその『ほとんど』が異常だと言う。

『普通ならその程度の傷、完治できるはずなんだよ。ただ如何してか、
あなたの体には相当の「負荷」がかかっている。現状、治癒できるの
はそこまでが限界だよ』

リカバリーガールの『個性』は『治癒力の超活性化』。人の治癒力を
底上げし傷の治りを早くするというものだ。しかし本来、治癒という
ものには体力を用いる。活性化させ早送りのように傷を治す彼女の
『個性』は、負傷者本人の体力などのコンディションが深く関わって
くる。

ただそれはかなり深手な傷の場合で、諸葉の傷程度ならば多少疲れ

た程度で治癒できるはずなのだ。しかし諸葉の体には『個性』により肩代わりしたダメージが蓄積されており、傷を完治させるには至らなかったと言う。

『あなたの「個性」が何かはわからないけど、使いすぎには気をつけな。じゃないと私にも手がつけられなくなるからね』

——試験終了後そのような忠告を浴びていた諸葉だったが、緑谷の怪我を治すため『個性』を使用。リカバリーガールからしてみれば、諸葉が自身の忠告にも耳を貸さなかったと捉えられてもおかしくはない。

「癒代くん？」

「……まあ、色々あった」

「そ、そうなんだ……」

色々何があったんだろう……。そんな疑問を抱くもさすがにそこまで聞くことはできないと、緑谷は苦笑しつつ話を終える。

そんな緑谷に対し、今度は諸葉が質問を投げかける。

「緑谷、お前の『個性』ってなに？」

「うえ？？ ぼ、僕の『個性』？？ な……なんで？」

諸葉の質問に激しい動揺を見せる緑谷。なぜそんなあたふたとするのかわからないが、諸葉は話を進めるためスルー。

「みたところ単純な増強型。でも『個性』に体が追いついてない……ように見える」

『個性』が発現してから100年以上もの時が流れ、研究を重ねるうちに『個性』とは身体機能の一つという結果にたどり着いた。

4歳までに発現する『個性』は最初こそ扱い慣れず暴走してしまう。だがそれは年月を重ねるにつれ馴染み、手足のように動かせるようになっていく。

緑谷は高校1年。短くとも11年自身の『個性』と共にあったはず。だというのに未だに扱いきれず、超パワーと引き換えに自身の体を傷つけている。

諸葉のように『個性』使用による代償ではなく、純粹に体が追いつ

いていない。諸葉にとって緑谷の『個性』はどこか他とは違う、別の何かに思えた。

「え、ええと……それは……」

諸葉の問いに対し、ひどく焦った表情を浮かべる緑谷。右へ左へ瞳を動かし、先ほどまでよりもさらに一段大きい動揺を見せる。

「まあ、話せないなら無理して話さなくてもいい」

そんな緑谷の様子を見て、語るに語れない理由があるのだろうと察する諸葉。それにも自分にも打ち明けていないことがある以上、問い質す様な真似はできない。

諸葉の一言に、ほっ、と隠れて安堵の息を吐く緑谷。

諸葉の言う様に彼の『個性』は確かに特異なものだった。それはかつてとある『最高のヒーロー』から授かった、義勇の心が紡いできた結晶。

しかしその力はヒーローに憧れる『無個性』だった少年が手にするには大きすぎた。故に体が耐えきれず悲鳴をあげ傷ついた。

『誰にも話してはならない』という約束の下 授かった力。それが入学早々にバレそうになったことに慌てた緑谷だったが、無事に何事もなく終わってよかったと内心で再び息を吐く。

「じゃあさっさと戻ろう。ガイダンス、とつくに始まっている」

「う、うん！ そうだね！」

そうして二人は、クラスメートたちが待つ教室へと向かって足を進めた。

10. 『二日目』

時は流れ雄英高校生活二日目。

制服を身につけ電車に揺られながら通学をする諸葉。その前には吊り革を掴みともに通学をする響香の姿もある。

「はあ、今日から本番かあ……一体どんなことするんだろ『ヒーロー基礎学』」

表情をややげんなりとさせながら呟く響香。

初日はガイダンスということもあり昼頃には終了。『個性把握テスト』以外は特にヒーロー科らしいことはしていないので、ある意味真のスタートと言える日である。

時間割では午前中が必修科目、そして午後からが響香の口にした『ヒーロー基礎学』が行われる。雄英は単位制の高校で、ヒーロー科はこの『ヒーロー基礎学』が最も単位数の多い科目である。

雄英高校ヒーロー科に入ったものはこの『ヒーロー基礎学』を学ぶために来ている、そう言ってもいいほど最も重要な科目なのだ。

「初日からあんなだったし、また除籍とかあんのかな……」

「さすがに、ないと思うよ」

昨日の出来事がよほど効いていたらしい。ここから毎日あの恐怖の除籍試験の連続なのかと、響香は心配から表情を曇らせる。

さすがにあそこまで露骨なこととはしないとは思いが、しかし雄英高校の教育方針は『絶え間なく壁を用意する』というもの。その壁を乗り越えられない、立ち止まってしまうものは結局は折れてしまう。

故にPlus Ultra——壁を乗り越えさらに向こうへ行かんとする、鋼の精神が必要となるのだ。

「それにオールマイトに教えてもらえる。楽しんでいこう」

さらに今年からはNo. 1ヒーローであるオールマイトが教鞭を振るうのだ。数々の伝説を残してきた彼直々に教えてもらえるなど、ヒーローを目指すものにとっては光栄の極み。否が応でもやる気が出てくるといえるものである。

現にその話を思い出した響香は先ほどまでの曇り顔から一変、不適

と取れる笑みを浮かべている。

「でもやっぱり、最初だし軽めがいいなあ」

「多分……それないと思う」

先述した通り、雄英高校のカリキュラムは午前が必修科目、つまりは普通の高校となんら変わりない授業をする。ヒーロー科といえど勉学を疎かにすることはできないのだ。

しかもここは国立、しかも偏差値は79の高校だ。並大抵のレベルの授業が行われるはずもないわけで

「んじゃ、次の例文の仲間違っているものは?」

そう言い、教科書を片手に生徒たちに問いかけるのは英語担当のブレゼント・マイク。

諸葉は教科書に目を落とし質問された例題を解く。確かに内容は難しいがまだ対応できる範囲で、1分とかからぬ内に答えを導き出す。そして空いた時間に教室の面々に目を向けると、ほぼ大半が余裕綽々の表情を浮かべている。さすがに合格しただけあり、皆それなりに勉強はできるようだ。

ただ一人二人ほど、怪しいと思われる生徒もいる。それは暗いピンク色の肌をし二本の角を生やした女子生徒と、金色の髪に黒のメッシュの入った男子生徒。ギリギリ横顔が見える程度だが険しい表情を浮かべているように見える。

この2名以外はさほど問題なく例題を解いているのだろうか、誰も答えようとはせず教室は静まりかえっている状態だ。

そんな生徒たちに痺れを切らせたのか、サングラスの奥に隠れたブレゼント・マイクの瞳が一瞬光り

「おらエヴィバディヘンスアップ盛り上がれ!!?」

そう叫ぶとともに拳を天井へ向けて振り上げる。どうやら彼には静かな授業というものが我慢ならぬらしい。

しかしそんな彼の叫びは教室へと虚しく響くだけだった。

昼休み。教室の面々もそろそろと食堂へと向かい、使用者のいなくなった机や椅子やらが取り残される。

そしてこの食堂はクックヒーロー『ランチラッシュ』というヒーローが作っており、一流の食事が安価で食べることができるのだ。舌にも家計にも優しい！

本来は弁当を持参する諸葉だが、ランチラッシュの作る料理の味には興味があるので今日は食堂へと足を運ぶつもりだ。

早速、皆に続いて食堂へ向かおうと席を立ったその時、諸葉の横に近づく二つの人影が。

「よお、お前も食堂行くのか？ だったら俺らと食いに行こうぜ！」

現れたのは先ほど授業で険しい表情を浮かべていた金髪の少年、そしてツンツンとした赤い髪が特徴な少年の二人。

全くの初対面で会話もこれが初めての二人。というか名前もまだそこまで覚えていなかったため、諸葉が返答に困っていると

「おおわりーわりー、俺切島鋭児郎きりしまえいじろう！ よろしくな！」

「んで俺は上鳴電気かみなりでんき、よろしくな！」

諸葉の空気を察したのか、赤髪の少年——切島が自己紹介をする。それに続き金髪の少年——上鳴も名前を名乗る。

「俺は癒代諸葉、よろしく」

「おうっ、よろしくな癒代！」

笑顔を浮かべ右手を差し出してくる切島。諸葉は差し出されたその手を握り返し、隣の上鳴とも握手を終える。

「で、どうよ？ 俺たちと昼飯食いにいかねーか？」

「うん、いいよ」

「おっしや、じゃあさっそく行こうぜ。ランチラッシュが作る飯だ、絶対混むぜ」

そう言い教室の出口へ向けて歩き出す切島。その後には諸葉と上鳴も続き、三人は食堂へと向かって足を進めた。

切島の言う通り食堂は大変混んでおり、なんとか行列を乗り越えて席に着く三人。

「いやー並んだ並んだ。昼飯にありつくのにも一苦労だぜこりや」
お盆に乗せたカツカレーをテーブルに置きながら、先ほどまで並んでいた人の列に苦笑いを浮かべる上鳴。その隣には大盛りの牛丼を注文した切島が腰をかけ、その正面に諸葉が座る。ちなみに諸葉は唐揚げ定食だ。

合掌しきつそく目の前の料理へと箸を伸ばす三人。クツクヒーローというだけあり、料理の味はさすがの一言。三人とも食事のペースは上がり、切島に至っては丼ごと食うのではないかという勢いで食事を腹に収める。

「そーいや癒代ってさ、耳郎とよく一緒にいるけど同中？」
カレーを半分ほど平らげた上鳴が、不意に諸葉へ質問を投げかける。

「うん。それに、幼稚園も小学校も一緒」
「つまり幼馴染ってやつか。俺も同じ中学の奴がいるけど、仲がいいってほどじゃねえし……知り合いがいるっていいな」

「顔知ってる奴がいるだけでも十分だって。俺なんて全員知らねー奴だぜ？」

どうやら切島はあのピンク肌の女子生徒と同じ中学出身らしい。対し上鳴は同校出身はなし。とはいえ県外からの入学者がいる雄英ではそれは普通のことと、むしろ知り合いがいる二人の方が珍しい部類である。

「にしても雄英の女子ってレベル高くない？ 全体的にこう、プロポーシオンがいいって言うかさ」

「健康的なのはいいこと。ちゃんとした食生活を送ってる証」

「いやそーいうことじゃなくてさ。なんつーかこう、テンション上がらね？」

「テンション……？？」

嬉々とした表情で語る上鳴。確かに彼らのクラスの女子は高校生にしては発育の良い体つきをしている。思春期の少年にとって同じ

クラスメートがそういった女子であれば、そうした嬉しいという気持ちになるのも仕方ないことだろう。

しかし諸葉は特にピンときていないのか、首をかしげ上鳴を見つめ返す。

「お前それでも男かよ癒代お……」

「ん……生物学上は男、間違いない」

「いやそうじゃなくて……うん、まあそれでいいや」

話の噛み合い具合の悪さに諦め、深いため息をつく上鳴。すると牛井を平らげ、空になった井を置いた切島が話題を出す。

「次の『ヒーロー基礎学』だけどよ、何すると思う？」

「んーまだ初回だしなあ……またガイダンス的な何かじゃね？」

初回ということもあり無難な答えを返す上鳴。

「多分違う」

「へー、じゃあ癒代はあむっ……んぐっ……どう思う？」

異を唱える諸葉に、上鳴は残ったカレーを口に頬張り尋ねる。

「初日からあれだから。多分初回だからって軽めはない……と思う」

「確かに入学式からあれって考えたら、初回だからって優しい授業だとは思えねえな」

ヒーロー科の最高峰。たとえ初回といえど生半可な授業はしないはず。昨日の『個性把握テスト』を思い返し、うんうんと頷く切島。

「どのみち次でわかる。楽に構えてればいい」

「だな。まあ俺としては対人訓練がいいけど」

「俺も。頭使うのはもう勘弁だわ」

そうして談笑を交えながらの昼食は終わりを告げ、ついに午後の授業がやってくる。

教室にて、次の授業の教師を待つクラスの面々。

「わーたーしーがー!!？」

すると教室の外、廊下から聞きなれた声が聞こえ

「普通にドアから来た!!？」

バンツ、という音とともに豪快に開かれる入り口の扉。そしてそこから現れたのはコスチュームを身につけ、「H A H A H A!!」と笑い

ながら入室するオールマイト。

『平和の象徴』と謳われるトップヒーローの登場に教室内はざわめき
歓喜の声に包まれる。

「元気がいいな少年少女！　しかしヒーローの卵たるもの、それくらい
活気がなくちやあな！」

ニイツ、と白い歯をのぞかせ受け持つ生徒たちを見下ろすオールマ
イト。

「では早速、今回のヒーロー基礎学の内容を発表しよう！　それは――
『戦闘訓練』だ！」

そう言い生徒らに突き出したプレートには『BATTLE』の文字
が。切島や上鳴は戦闘訓練と聞き口の端を釣り上げ笑みを浮かべる。
周りの面々も突き出されたプレートを眺め、各々がやる気をにじませ
る。

そんな生徒たちの雰囲気を感じ取ったオールマイトはさらに「H A
H A H A」と笑い

「いいねいいね、やる気満々つてやつか！　じゃあその熱が冷めない
うちに、さっさと『こいつ』に着替えようか！」

左前の壁が突き出し、1と2の番号が刻まれたケースが姿を表
す。それらは諸葉たち生徒がかつて入学前に学校へ要望を送った
『戦闘服』コスチュームで、生徒らはそれが収められたケースへと歓喜の視線を向け
る。

「君たちが入学前に出した『個性届』と『要望』に沿ってあつらえたも
のだ！　これ持って着替えたら順次、グラウンドβに集合だ！」

『『はいー！』』

気分が高揚しているのか、まるで子供のような返事を返す生徒た
ち。もしも相澤だったならば絶対零度の一言をお見舞いされること
だろう。

しかしそこは新米教師のオールマイト。「元気がいいな」と再度笑
う。教師としてNo.1ヒーローの威厳というものを見せて欲し
いが、持ち前の人柄の良さが裏目に出てしまっている。

「格好から入るってことも大切なことだぜ少年少女!!？」

だが締めくくりの一言。表情は笑顔でもはっきりと伝わる風格に、
一同は口を閉じ静かに耳をかたむける。

そんな生徒たちにビシツ、と指を突きつけ

「自覚するのだ！ 今日から自分は——『ヒーロー』なんだと!!？」

11. 次なる試練

着替えを終えグラウンド・βに集まった生徒たち。

彼女らのヒーローの『戦闘服』は一般的な服装ではなく、仮装パーティーか何かと言いたくなるような、そんな外見のものが多い。

例えば両手に榴弾に見せた籠手をつけていたり、テープカッターを思わせるフルフェイスのヘルメット、両肩に歯車を装備するなど個性的な衣装が多い。

しかも女子に至っては羞恥の感情など皆無なのか、体のラインをはっきりとさせるもの、かの透明少女に至っては手袋と靴以外は何も身につけていないと、年頃の男子高校生にとっては少々刺激が強いデザインが多い。

しかしヒーローとは人々からの人気が必要不可欠。こうしたわかりやすい、見ただけで『あのヒーローだ』と理解できるような服を着る必要がある。ようはオリジナリティーを出せ、という話である。

とはいえあまりにも刺激的な『戦闘服』の数々に、さしもの諸葉も目のやり場に困り天を仰ぐ。

「ああ……英雄最高、ヒーロー科最高……入ってよかった……」

そんな諸葉の足元にいつの間にか峰田は、そんな扇情的な『戦闘服』を身に付ける女生徒を見て歓喜の涙を流していた。ちなみに峰田の『戦闘服』は髪の色と同じ服に目元を隠すマスク、そして黄色の手袋と靴にマント、白いオムツのようなパンツといった風貌だ。

そんな峰田になんともいえない視線を向ける諸葉だが、不意にトンと肩を叩かれ振り返る。するとそこに立っていたのは『戦闘服』に身を包んだ響香だった。

「どう……似合ってる、かな？」

「うん、似合ってるよ……とつても」

「あ、ありがと……諸葉もその、似合ってるよ」

照れからほのかに赤く染まった頬をかき、恥ずかしそうに視線をずらす響香。彼女の『戦闘服』は絵の段階で見っていたのだが、やはりこうして実際に着ることにより格好よさや魅力といったものが増す。

幼馴染という鼻頂目を抜いたとしても十分に魅力的だ。

そんな二人のやりとりを傍観していた峰田。現在、彼の脳裏にはある一つの仮説が浮上していた。

「癒代……耳郎……お前ら付き合ってたのか？」

「は、はあっ!?? ちがつ、ウチらはそんな関係じゃ——」

震える指、というか体全体を震わせながら二人を指差し、消え入りそうな声で尋ねる峰田。そんな峰田の発言に明らかな動揺を見せる響香。

実際は思いもよらない一言に驚いたために出た反応だが、峰田にとってはその拒絶が間違った仮説を結論へと至らしめてしまう。

「テメエ癒代お……んな女に興味ないふりしやがって、実はプレイボーイだったかあッ!??」

「だから違うって！ ほら、諸葉からもなんか言ってやって……」

「なんでっ、なんだって耳郎なんだコラア!!? もっとグラマラスな奴なら他にいるだろうが！」

「……よし殺す」

最後に言い放った峰田の一言にプツン、と耳郎の中で何か切れる。即座に耳郎は耳たぶのプラグを峰田の体へ突き刺す。そして彼女の『個性』により増幅された心音が峰田の体へと送られ、悲鳴とともに峰田はその場に悶絶する。

呻き声をあげる峰田へ冷めきった視線を送る響香。一通り峰田が制裁を受けたのを見届けると、諸葉は倒れ伏す小柄な少年へと近づき「響香とは幼馴染で、だから仲がいい。峰田が思ってるようなことはない」

「ウグツ……それを早く言えよお……!」

授業が始まる前から瀕死の状態に追いやられる峰田。だがあの勢いだっつたら多分言っても聞かないと、諸葉は峰田が停止するのを待っていたのだ。

峰田とそんなやり取りをしている諸葉の後ろ、自らの体型を見直した響香は周りの女生徒たちへと視線を移す。どの生徒も自分より数段発育の良い体つきをしており、響香は再度、起伏の少ない自身の体

を見下ろしたため息を吐く。

「……ちゃんと牛乳飲んでるのに」

そんな響香のつぶやきは誰にも聞かれることはなく、クラス全員が集合したことを確認したオールマイトが声をあげる。

「揃ったな有精卵ども！ ではさっそく戦闘訓練の概要を説明しよう！」

その一言にざわついていた生徒たちは一瞬で静かになる。皆が聞く準備を整えたところで再度、オールマイトは口を開く。

「ここは入試でも使った演習場だが……さて皆は今から何をするかわかるかな？」

新米教師のオールマイト。生徒たちへの問いかけ方が子供にするそれだが、そこはヒーロー科の生徒。即座に多くのものが手をあげ各々発言をする。

「また入試のように対ロボットの訓練でしょうか！」

「やっぱ漢だったら一対一のタイマンだろ！」

「いやいやバトルロワイヤルの奴じゃね？」

そんな生徒たちの意見を一通り耳にするオールマイト。さすがN

O。1ヒーロー、全ての内容を聞き取り咀嚼することができたようだ。新米といえどそこはトップヒーロー。やはり教鞭を振るう才能もあるのだろう。

そんなオールマイトの開口一言目は

「せ、先生は聖徳太子じゃないから、一人一人発言してくれると嬉しいな……」

やはり新米は新米。苦笑いを浮かべたオールマイトは手を合わせ生徒たちへとお願いをする。

「さて気を取り直して……今回行うのは対人訓練！ しかもただの対人訓練じゃあないぞ！ なんと7人一組のチーム戦だ！」

「対人にチーム戦って基礎がなっていないのに大丈夫なのかしら」

「その基礎を知るためさ蛙吹^{あすい}少女！ ロボットではない、人に『個性』を振るうということを知るためのね！」

入試ではぶっ壊せばOKなロボットだった。無論、『個性』の加減な

どせずに全力で挑んだことだろう。

しかしそれが対人へとなれば話は大きく変わってくる。相手に大怪我を負わせない『個性』の制御、そして何より意志を持った相手との戦闘だ。ロボットのようは一筋縄ではないかない。

「でも7人一組って多くないですかー？ 私たち昨日知り合っただけか
りですよ？」

カラフルな斑模様の『戦闘服』に身を包んだ少女、あしどみな芦戸三奈が手を
あげて発言する。

「だからこそさ！ ヒーローにとってコミュニケーション能力は必要
不可欠！ 君たちがどれほどその能力を持っているのか、まだ出会っ
て間もない今が一番よく実感できるのさ！」

互いの『個性』の情報を共有しそれに適した役割を決める。プロに
なればた事務所とのチームアップする機会は数多く出てくる。

どんな相手であっても一定水準の連携が取れるヒーローは大変重
宝されるのだ。

「ルールはこうだ！」

・それぞれのチームに一つずつ『ターゲット』が割り振られる

・相手チームの『ターゲット』に触れれば勝利！

・各チームには『捕獲テープ』が三本支給。巻かれた人は強制的に
リタイアだ！

・『個性』は使用していいがいたずらに傷つける行為は厳禁、即強制
退場してもらうぞ！

まとめれば『個性』使用を認められた『陣取り』のようなものらし
い。

「そして次はお待ちかねのチーム分けだが……皆にはこのくじを引い
てもらおう！」

そう言いオールマイトは赤いボックスを手に持つと、生徒達一人一
人に中身を引かせる。

諸葉も順番が来ると箱の中へと手を突っ込み適当に中身を取り出
す。取り出したボールに書かれていたのは『A』という文字。

Aチーム：飯田、麗日、尾白、耳郎、緑谷、八百万、癒代

Bチーム：青山、蛙吹、切島、障子、常闇、爆豪、峰田
Cチーム：芦戸、上鳴、甲田、砂糖、瀬呂、轟、葉隠

以上のチームに分けられたクラスメートたち。

「さて自分のチームはわかったな！　そしたら各自指定された場所まで移動してくれ！　あ、ちなみに地図はボールの中に入ってるからね！」

オールマイトの言う通りボールはガチャガチャの景品よろしく、真つ二つに別れる構造をしており、中には折りたたまれた地図が入っていた。

諸葉は地図を見ながらそのポイントへ向けて歩き始めると、ちょうど近くを歩いていた八百万が近寄り声をかける。

「癒代さんもAだったんですね。よろしくお願いしますわ」

「姐さん……こっちもよろしく——」

振り返り、そこまで口にしたところで諸葉は言葉を途切らせる。そんな諸葉に八百万は首を傾げ不思議そうな表情を浮かべ

「どうかされましたか？」

「……姐さん、『戦闘服』ちゃんと要望出した？」

「ええ、きちんと要望は出させていたのですが……それが何か？」

はつきり言おう。八百万の『戦闘服』はかなり露出度が高い。というか胸元から臍^{へそ}まで前がパツクリと開いているというのは如何なものか。

基本は動じない諸葉だったが、さすがに彼女の『戦闘服』はスルースることができなかつたらしい。

「……いや別にないもない」

本人がいいというのならそれでいいのだろう。諸葉はそう納得し、これ以上彼女の『戦闘服』に関しての考察をやめる。

だが諸葉は知らない。彼女が当初要望した『戦闘服』は法律に抵触する恐れがある程のものであつたことを。

そんなことなど露知らず、諸葉は目的地へと向けて足を進めるのだった。

『ターゲットと書かれた長方形の何か』が置かれた目的地へと到着し、小さな円陣を作る諸葉と一同。

そんな中一番に声を発したのは、全身を白い鎧のような何かで包み込んだ男子生徒。

「まずは軽く自己紹介と互いの『個性』を確認しよう。俺は飯田天哉、加速する『個性』を持っている」

「あ、飯田くんだったんだ」

どうやら中にいたのは飯田だったらしく、自身の個性について軽く説明をする。

「それでは次は私が。私は八百万百と申します、『個性』は生物以外なら大体作り出せるといったものです。よろしくお願いいたしますわ」

「俺は尾白猿夫^{ましらお}。『個性』は見ての通りこの尻尾だ、よろしく」

「私は麗日お茶子。『個性』は触れたものを浮かせるってやつです、よろしくね！」

「ウチは耳郎響香。プラグをつないで心音を増幅したり、地面につないで索敵したりできる『個性』、よろしく」

チームの大半が自己紹介を兼ねて『個性』についての軽い説明を終える。そして順番は諸葉と緑谷へ。

「俺は癒代諸葉。『個性』は治癒系統、よろしく」

「ぼ、僕は緑谷出久です。『個性』は超パワーだけど、使えば体もボロボロになっちゃうってやつです……よ、よろしくお願いします」

自己紹介も終わり、いよいよ作戦に入るわけだが。ここでポイントとなるものは『攻守』の比率だ。

全体の『個性』のバランスを考え、どう防衛側と攻撃側を組み立てていくのか。ここで勝敗が分かれるといっても過言ではない。

「攻撃に割り振るか守備に割り振るか、悩ましいところだな……」

「あまり守りに偏り過ぎてもターゲットを取れませんし、逆もまた然りですわ」

攻守のバランス。守れて且つ、ターゲットを取れる攻撃力を有した編成。

どうすれば良いかと頭を悩ませていると

「あ、あの……僕に一つ考えが……」

おそるおそる、緑谷が手を挙げつつ控えめに発言をする。

「む、緑谷くん……してその考えとは？」

「う、うんっ。まず編成だけど、守備には八百万さんと耳郎さんがいいと思うんだ。八百万さんの『個性』は状況に対処しやすいし、耳郎さんも索敵で奇襲にも対応できる」

『創造』の八百万と『イヤフォンジャック』の耳郎。確かに守るという観点でいえばこの二人の『個性』は非常に心強い。

「攻撃側は機動力のある飯田くん、身体能力の高い癒代くんがいいと思う」

「それじゃ俺はどっちがいいかな」

「直接戦闘を考えたら、尾白くんは守備側に回ってくれると安心かな。それと麗日さんも『個性』で浮かせれば主導権は握れるだろうし、守備側でいいかな？」

「うん、大丈夫！ 頑張るね！」

各個人の『個性』の持ち味を把握し、この場において最善の選択を取る。緑谷がこれまで培ってきたヒーローの知識は、この場において『個性』以上の武器となりえていた。

「僕は万が一『個性』を使った場合を考えて、癒代くんと同じ攻撃側に回る……ざっとだけどころな感じでどうかな？」

「そうだな、俺からは何も無い。緑谷くんの案がいいと思うが、みんなはどうだ？」

「私も緑谷さんの意見に賛成ですわ」

「ウチもないかな」

どうやら緑谷の案が本格的に採用されたらしい。そのことに緑谷は嬉しそうに口元をほころばせ

『それじゃあ訓練開始だッ！』

インカム越しに聞こえたオールマイトの合図に従い

「それじゃあ行くぞ！ 緑谷くん、癒代くん！」

「うん！」

「うん」

「それでは、私たちも準備をしましょう」

「だね」

「よっし、やるぞー！」

「ははっ、あんまり肩に力入れすぎないでね」

それぞれがそれぞれの役割を果たすべく行動を開始した。